

329

191



始



279 (2) 103 (5) 16 (14)

259 (17)

529
197

牲 犧



院書竹植

329-191



作オイツンヌンダレエリアガ

譯鳥朝藤加

大正
2. 12. 25
内交

序

ダヌンチオの數ある作品のうちで『犠牲』の一篇が最も傑れた作品の一ツに數へられて居ることは今更事新しく述べるまでもないことであるが、よしその事がないとしても私は私自身讀んだ此の作者の四五の作品中最も深い印象を此の一篇から得た事だけは躊躇せず語り得るところである。わけても此の作から二年後に書かれた『死の勝利』と此作とを讀み比べることによつて進むことの出來た作者ダヌンチオその人の内面生活の過程は、私にとりては今日なほ暗示に富んだ考究題目として残つて居る。

私は嘗て人生觀上の虛無主義と云ふ言葉は北方のロシアに於て最も著しく使用されて居るが、實際のところスラヴ民族のうちに眞の虛無主義のあり得る筈がない、眞の虛無主義はむしろ南方のものであると云ふやうな事を述べたことがあるが、私の此の見解に最も有力な裏書を與へてくれるものは、茲に擧げたダヌンチオの二作——『犠牲』と『死の勝利』とである。隨て此の一點からだけでも、私は此の二作を自分にとつて非常に貴い考究材料だと思つて居るのである。

兎に角私がこれまで讀んだ多くの作品中、ダヌンチオの『死の勝利』ほどに深刻に人生觀上の虚無主義を暗示した作品はない。この作ぐらゐ死の力の尊嚴を生活意識の核心に感じさせる作品はない。而も此の作を書いた二年前に同じ作者がトルストイの影響によつて書いたと稱せられる『犠牲』の一篇を公けにして居ると云ふ事は、何と云ふ意味深いことだらう。

『犠牲』がトルストイの『戦争と平和』の影響によつて書かれた作品であることは既に評家によつて論證せられたところである。が、それは必ずしも『戦争と平和』ばかりの影響とは見られない。私一個の見解からすれば、『戦争と平和』よりは寧ろ『アンナ・カレニナ』の一篇こそ格好の比較材料である。『犠牲』に於ける罪惡の犠牲としての幼兒を中にしてのチュリオとジウリアノとの激しい苦悶と、『アンナ・カレニナ』に於けるアンナとウロンスキーとの同じやうな苦悶とを比べて見るだけでも、明らかにその事が考へられる。

自分の播いた種は自分が刈らなくてはならぬ。人は何故自分の爲した事について、自分みづから苦しまねばならぬか。さう云つた人間の苦しみを特に男女の關係に於て

深刻に描き出した點に於ては、いかにも『犠牲』の一篇がトルストイの作と相通じたところが多分にある。又それを描くに冷酷と云つても好いほどな鋭い解剖を行つてある點に於ても兩者相通じて居る事は事實である。けれども此の兩者の比較が私に與ふる最後の興味は、そのやうな兩者の類似そのものにあるのでなくて、寧ろそれほどの類似點を持ちながらも、生そのものに對する作者の最高の批判が、全く別な方向に向つて加へられつゝある事に於てある。即ち一は神への道であり、他は虚無への道である。

トルストイとダヌンチオ、何と云ふ驚くべき比較であらう。『犠牲』と『アンナ・カレニナ』乃至『戦争と平和』——何と云ふ驚くべき類似と相違とが此の兩者の間に存することであらう。更に『死の勝利』と『クレエツェル・ソナータ』を比較するのは何と云ふ意味深い事であらう。

要するにトルストイの影響に成つた作品としての『犠牲』の研究は、同時に人間生活に於ける最後の問題の考察を含んで居る。啻にダヌンチオの傑作としてばかりでなく、以上のやうな意味合ひで『犠牲』の一篇には私達にとりて此上なく貴い或物が藏

せられて居るのである。

私はこのやうな貴い作品を邦語に翻譯して公にするに至つた加藤朝鳥君の抱負と努力に多大の敬意を表する一人である。

大正二年十二月八日

相馬御風

自序

Hardingの英譯による表題が「犠牲」となつて居るし、Hornbrowの米國譯によると「侵入者」となつて居る。此の題意は米國譯の方が原意に叶つて居るが、「犠牲」と云ふ名で始め日本に紹介された縁から、そのまゝにした。英譯と米國譯とを比較して見ると、その語路文脈において非常な相違がある。

英譯は豊富な妖艶な氣分を傳へて、文章が流暢で、讀みながら一種の古典味があるに較べて米國譯は精緻で、科學的で、心理解剖のメスが特に鋭く輝いて居る。英譯の古典味に對して、ヒツザンな味ひがある。

此の兩譯を並べて見ると、ダメンチオが原作の面影を稍完全に知るに好都合であると同時に、之を譯するにあつても、それ相應の用意がなくては叶はぬ事は明白である。

此の翻譯の世に出るやうになつたのは全く親友光用君のお蔭である。と同時に此の書中にある詩を譯して下さつた夕咲柳虹二君にも謝意を表します。

大正二年十二月六日

岡山三好野花壇にて

朝鳥

犧

牲

裁判官の前に出て、

「私は殺人犯を犯した。私——此ッリオ、ハミル——が此手を以て殺さすに居さへすれば、あの弱い彼は、今も必ず生きて居る。全く私を殺した。私の家で、其犯罪の計畫をたて、不静か思慮さ、自由な意志とを以て行つたのだ。犯罪の後も一少年と云ふもの、此秘密を深く胸の裡に收めて、自分の家に棲み暮して来た。今日は其犯罪の一週年の日である。裁判長閣下、願はくば、私の告白を聞いて、裁判けよ………」

「私は這う云ひ能ふであらうか？」

「能はぬ。又云はふとも思はぬ。斯る事はもとより法律の判き得べきものではない。世界中、如何な法律も、私を宣告し得ないであらう。」

「と云へ、私は罪を告白し、懺悔して見度い願ひあつて、それを抑える事が出来ぬ。何者かに告白し、懺悔して、此の身を軽くして見たい。」

「何者とは誰？」

で、話して見ると、

四月であつた。ラ、バチオラの大構な田舎別荘に居る實母と、復活祭の季節を供に暮さうと思つて、四五日前から、其處に移つて棲まふことにした。私とジウリアノと、二人の子供——マリアとナタリア——と四人連。結婚してから七年目と云ふ年であつた。

其より三年前に、復活祭を矢張此別荘で送つた事があつたが、其時は實に平和、愛、感謝、幸福の満ち溢れた歡喜の祭であつた。白い、嚴めしい、寺院の様な別荘が、紫丁香花の高い壁の中に浸つて居た。其頃は丁度二番娘のナタリアが漸く嬰兒から少女に變らうと云ふ樂もしい夢を裂いて綻び始めた醜の風情であつたし、ジウリアノも其笑ひの裡には、哀愁の薄らかな、一抹の影を宿さぬとは云はれぬながらも、打ち解けた心の數々を盡した優しさに、私に對する親切は湧きあふれて居た。其も其筈、妻の氣嫌を損ねた私が漸々後悔し初めて、從順になつた揚句なので、實母も事の無邪氣なあまりに、手づから橄欖樹の

葉を私等の寢床の上に結んだり、壁に架けた銀の聖水の瓶に、水を入れ變へたりなど、慈しみは深く懐しく我が身體を潤ほした。

が此の三年の間の變りやうの酷たらしさよ。ジウリアノと私との間は遠くかけ隔れて了つた。私の犯した不徳の罪は目の當りまぎまぎと苦い實を結んだ。今迄遠慮會釋も無く行つた數へされぬ程な慘酷な所業、其も皆私の汚れた腐つた心から起つたもの、情熱の燃ゆるまゝに燃え、快樂の誘ふまゝに溺れ溺れて、此の身は二年の長きを、妻が親友の女の二人にさへ戀人の秘密な情緒を捧げました。又、或る時は公然遠くフロレンスなどに通れさ迷つては、其處に淫な女テレサとの數週の長い居續けに、尙ほも結びはてぬ夢を貪りもした。

テレサに纏れた悪縁は纏てラツフォオ伯と戀敵、鞘當の果は血を流す決闘も辭さなかつた。勿論此様な事はジウリアノの耳に這入つたには違ないが、彼は疑乎堪えながら沈黙の裡に苦しい想を抑へて居た。

此事件に就いても、又他の之に似た醜聞があつた時でも、妻は私に一言二言問はぬでは

て、嘗つては燃えに燃えた情熱の夫を前にしながらも、家の道具かなんどのやうに心得、接吻も抱擁も何の味ないものになつてしまふ、そこから世間に入りふれた妻君の様な態度が其頃のジウリアノにもあつた。すくなくとも愛慾の峻るまゝに處さらはず抱きあふを雅かならぬことに心得てしまつた妻のジウリアノは、たとひ私の體に近づかうと、更に抱擁を求め様とする風情もなく、私も妻と近づいて、呼吸の温さが、頬に觸れても、抱かうと云ふ心も起さず、只其頭のあたりの二つの黒子ばかりが、冷かに私の眸に映るばかり、嘗ては私の焙るやうに熱した接吻の下に、絶え入るばかりに、蒼ざめた其女が、是であらうとは、全く思はれなかつた。

私は唯妹としての愛を施すばかり、妻も只兄として私を見た。妻も固より斯うなつた落漠の愛の破目を悲しんだのであらう。私ももとより喜ばなかつた。斯うして二人の愛情は、没せられて了つた。二人の唇は既う決して合ふことは無いであらう。斯廢になつても、私には例の卑劣な、自我中心があるものだから、妻に恩を着せて、せめても妹としての愛情を施してやるのが、私の寛大で、妻は是を感謝せねばならぬ筈だなどと、平然とし

た心で居た。吁！此様な夫婦の仲、是が一生涯續かねばならぬと思つた時、私は實に呪しかつた。乾坤一擲、永遠に得ずんば、瞬時に失はんなど、果斷の事も幾度も考へて見た又遂には肉の抱合が、唯一の一致だとも思ひ迷つた。又或る時は飽く事知らぬ種族保存慾が、私等の關係で、新しい後繼を作る事に此の破れた愛を托さうかと、此様な事をもつくつく思索して見た。

總の夢は去つた。炎の消ゆる様に無くなつた。私の靈は——私は告白する——此荒唐の上、真底から慟哭した。吁！此荒んだ生涯を續けねばならぬか……否、否、此避け難い運命よ、果して避け難しと云ふが故に避けまいで済まされるであらうか。否、否。

若したゞ此の運命に甘んずるとすれば其の最後の唯一の慰めとすべき理由は、只御互の罪で愛が減びたのではないと云ふだけだ。止みがたい自然の結果からだといふだけに過ぎぬ。私等は幾度となく新たな感情——昔の較べて一層深い——を以て相結ばうとしたことぞ。あゝ新に呼び起す愛、鮮やかな醒めた様な愛は、呼びおこせもしたが昔の甘い絢爛に較べて、これは寂寞と清澄との冷たさのあまりに多く宿された事よ。さりながら寂寞と清

澄……名は冷たくも我等が生涯にとつては儘に崇高い祝福には違ひなかつた。

が此崇嚴なプラトニックな淨樂……、あはれ、犠牲となる者は、微笑むで犠牲となると云ふ一語に盡きる。

此新生涯は、既う夫婦ではない。兄妹だ。妹の前で兄は總の行動が束縛なく、自由に他の女に接し、自由に外泊もし而して歸つてから妹としての種々な親切深い注意——卓の花瓶に薔薇を挿したり、身邊に取り散らかつた物を整頓したり、丁度女神の在居に來る様な感じ——を受ける。妻は全く妹と變つた。是が或は私にとつては、此上ない幸福かも知れぬ。が若い美しい女が、其一生涯の春を犠牲にして、而して兄に事へる！時たま接吻を酬ひられても、教會堂の儀式の様なものを、其清い柔和な額に受けて、満足して居るに過ぎぬ。吁。ジウリアノの身は全く犠牲となつたのである。

が時には妻の此心根が如何にも可愛相に思はれて、感謝の念に堪えず、情婦の許に外泊する夜など、優しい悲しい調子で、長々と手紙を書いて送る事さへあつた。ジウリアノも亦、情婦の住所を認知つて私に手紙をよこして、其が、私と同じ日に投函される事もあつた。私の情婦が妻の手紙を見ても、別に嫉妬がましい事もなく、私が妻に盡す心と、亡くなつた妹のコスタンザに盡す心と同様に見て居た。

私が何れ程に我慾主義に眼が眩んで、自分勝手ばかり働くとは云へ、時々閃いて來る本然の光を認めずには居られなかつた。ジウリアノが、此様な犠牲を、何時迄續け得るか。彼は一生涯を私に捧げて居る。生涯を捧げるには其だけの愛がなくなつてはならぬ、其に彼は永遠に妹だ。ジウリアノは、心の中に、死よりも苦しい絶望を抱いて居るであらう。吁。あの純潔な心を持つた、凜とした、感泣すべき女を、他の汚らはしい女の爲めに、何の悔ゆる所なく犠牲にして丁ふ。是程に慘酷な所業が又と世にあらうか。

私は又思ひ出す。(其頃の心の顛倒さに私は今でも呆れて居るが) 何とかして胸に蟠まつて來る良心の苛責を鎮めやうと、何時も種々な理屈を考へたのだが、結局る所斯うだ。堪えられぬ程な大きな苦痛にあつて、始めて道徳上の、大きな行ひが出来る。妻のジウリアノも、私が與へる苦痛に打ち克つてこそ、始めて胃すべからざる淑女となるのだと。

ジウリアノの内心の苦悶は、遂には身體に彰はれて來た。性來の蒼白い顔が鉛色になつ

て、暗い影が漾つて居る。一度ならず其顔には、苦痛を湛えた痙攣が現はれ、又頭から手迄ワナワナと震えて、急に瘡にでも攻められる様に、齒の根をガタ／＼と音させる事もあつた。或夕暮の事、壁を隔て、泣き叫ぶ聲が聞えたので、急いで行つて見ると、ジウリアノが箆筒に凭れたまゝ、劇薬にでも中つた様に、弱々しい五體を凝らせて苦しんで居た。私を見ると手を出して、凝乎と私の手を握り緊め、

「ツリオ様、助けて。助けて。」

顔を私の顔の近くに寄せて、ありたけの臉を開いて、私を凝視めた。夕暮の憎とした光に其眼が大きく見え、瞳のなかには名づけ難い苦悶が漾ふて居た。凝乎と瞬もせずに私の顔を見て居る。私は急に恐ろしさに襲はれた。

夕暮の影が身邊に罩めて、開いた窓には窓掛が静な風に揺いて居る。鏡の前の卓上の蠟燭は輝いて居る。窓掛の搖ぎと、蠟燭の火の閃きが、青白い鏡に映つて、私には殆んど名狀の出来ない恐怖が襲つて、身の邊が矢鱈凶事に取圍まれて居るかの様に見えた。

妻は毒を呑んだのではなからうか……と思ふ刹那ジウリアノは、身中の苦悶に堪えら

れぬ様に、私の胸に其體を投げかけて、亂れた聲で

「助けて、ツリオ様、助けて」

と叫んだ。

あまりの恐ろしさに私は聲も出さず、筋肉一つ動し得なかつたが

「仕うした。仕うした。ジウリアノ、話して呉れ、仕うしたのだ。」

と聲を絞つて云つて見ると、妻は一寸顔を上げて、私を見た。私の顔は、妻のよりは尙

蒼く、震へて居たであらう。

妻は私の顔を見ると如何にも驚いた様な口早に、

「いえ何でもありません、例の持病なんです。何でもありませんよ、あの、直と治りますわ、お驚き下さいますな、ツリオ様。」

と云はれて見ても、私の怖ろしい不安は、仕うして去らう。例の持病……其様なものではない、私は身の周圍に怖ろしい悲劇が縋まつて居る様で、「汝の爲めだ。汝の故だ。ジウリアノを此様にしたのは汝の罪だ。ジウリアノに死なうと思はせは誰だ」と耳の中で何か

が叫ぶ様で、私は其手を把つて見た。其冷たさ、額の上にも氷の様な汗が滲んで居た。

「否、確に持病では無い。ジウリアノ。後生だ、話して呉れ、何も秘す事は無い、ジウリアノ、お前は毒を飲んだのだらう？」

と云つて、私は怖れに満ちて目を見開いて、遁れる所は無いかと、卓や床の上や、室内のあらゆるものを見廻した。

ジウリアノは私の云ふ事が判つたか、再び私の胸に凭りかゝつて、私の肩に固く唇をあて、震へながら云つた。(汗！其折のジウリアノ、不安な声色——私は到底生涯忘れ得ない)

「いえ、いえ。ツリオ様！」

私等二人の其折に突差に襲つて来た内心の亂れ、苦しみ程、悲惨な物が又と世の中にあらうか。暗い、暗い室の中に二人は黙つて堅く抱きあつた。際涯ない苦悶の世界の渦巻く様な中を「若し眞實なら」「眞實なら」と電光が閃き渡つた。

ジウリアノは、其顔を私の胸に埋めて、絶えず震へて居る。身體の苦悶の激しい間にも

「毒を呑んだか」と云ふ私の問を不思議に思つてばかり居るらしい。

「何故、其様な氣になつて呉れた。」「何故毒を飲んで呉れた。」

私は夢中になつて叫んだ、何もジウリアノに聞かせる爲めに叫んだのではないが、妻は聞いたのに違ひない、毒を呑んだとは、本當か、嘘か知る暇なく、二人は早悲劇の運命に囚はれて、現心を失つて居た。急に妻は泣き出した。其涙と私の涙とが流れて、雫となつた。熱い雫！遁れぬ運命！

其後數月経つてから判つたが、妻は毒を呑んだのではなかつた。激烈な複雑な内心の煩悶で、女の根本を掻き亂されて終つたので、總が異つて來た。で、或る醫者に診察をして貰ふと、暫くの間、二人は少しの愛情をも謹まねばならぬ。若し妊娠でもすれば、其は彼の女の最後だと云ふ事であつた。

醫者の此診断は私にとつては勿論一大驚愕であつた。が其れと同時に安んずる所もあつた。其は此妻の病氣は、私一人が其原因をなして居らぬと云ふ事と、又私と妻と別れると云ふ口實が出來て、實母に對しても云ひ分が立つと云ふ此二つであつた。實母に常に私の

兄のフェデリゴと田舎に暮して居たのであつたが、丁度其折、羅馬に來たのであつた。

母は私の妻を非常に優しく介抱して呉れた。母の眼には、ジウリアノは理想的な嫁で、息子の爲めにも是程立派な配偶はないと思つて居た。美しさも、優しさも、家柄迄も、ジウリアノ以上の女はないと信じて居る。私が他の女の手を握つたり、他の女の胸に頭を撞せたりする事は有得べからざる事と思つて居る。元來母は二十年間も、同じ男の變らぬ愛情を受けて、破綻のない生活を續けて來たのだから、夫婦と云ふ衣の袖に、疲倦、悪感、奸策、破滅、愁嘆等が、包みかくされて有事は寸毫も知らぬ。元より私があの優しい何事も不足を云はぬジウリアノに、不満があらうとは母は勿論知らぬ、夢にも思つて居ぬ。ましてジウリアノの親切な態度を見て居て、私等二人の幸福を疑ふ事は、更に出来なかつた。其頃は、私は未婚婦のテレサ、ラフォオーに魅せられて居た頭で、テレサの妖魔の様な誘惑を思ふ度に、「吁！美き若人よ、汝は蛇に抱かれて、蛇は汝に抱かれて」と云ふアポロニオがメニポに與へた、彼の妖艶な詩句を思はずには居られなかつたが、幸にもテルサの親戚に不幸があつて、其爲め妖姬は暫く羅馬を去つて、地方に停まる事となつた。で、私は

ジウリアノに對して、平常よりは、熱心な親切を盡す事が出来た。其に此前の夕暮の慘じい事件が、未私の胸裡を去らなかつたので、ジウリアノと私との間には、以前にました、何か新しい、愛情の泉が湧いて出るやうになつたかとも思はれた。

醫者の手にかゝることは、ジウリアノは非常に苦痛にして居たが、母と私とが種々に説いて、兎に角、必要の事だけは爲る事にした。手術後は、一ヶ月或はそれ以上と病床に静養することになつた。其の爲めジウリアノの神経は、最早全く疲廢して終つて。極端に過敏になつた。私等が種々とジウリアノを慰めやうとする事に對してさへ、一度ならず、二度ならず苦悶のあまり狂しくも怒つたり、拒絶したりした。

或時妻は、唇の邊に苦しい皺を集めて、

「眞當の事を聞かして下さい、貴方は私を恐くはありませんか、吁！吁！此醜い私の姿、此様な姿を貴方は御嫌いなさいませんか。」

と云つた。自分を自分で嫌惡する凄い表情をして、陰氣な寂しさに黙した。

又或日の如きは、私が病室に行つて見ると、消毒薬の嫌な臭氣がした。此臭氣を私が好

まぬとジウリアノが察した時、急に顔を真青にして、叫びだした。

「何卒逃げて下さい、ツリオ様。全快する迄は這入つて下さいませ。此臭は……貴方は私をお嫌ひなさいませ。私は今此臭の様な醜いものです、何卒、ツリオ様、お逃げ下さいまし。」

ジウリアノは斯う云つて、涙をハラハラと流した。

又或時私は、彼女の神経が鎮まつたと見えて、熟睡して居た病床の側に行つて、暫く立つて居た、すると夢見ながら泣く様に、

「呸！あの様にすれば悟つて貰へたかも知れないのに……」

と云つた。私は驚いて、

「仕うした。ジウリアノ。」

と云つて見たが、彼は何も答へぬ。

「何を考へて居たの、ジウリアノ？」

再び問ふて見た時、ジウリアノは、只唇を動すばかり、苦しい間にも笑顔を強いて作

らうとするのが瞭々と見えた。

其刹那、妻は痛切に妻の心を讀んだ。悔恨の心、悲痛の心は聳々と私の胸に迫つた。呸！其折の私の心の中を、十分妻に打ち開ける事が出来たならば、私はどの様な値をも惜しまぬと思つた。「許せ、免せ、私が今日迄なした惨酷な仕業を、仕うか許して呉れ、あゝ仕うしたら許して呉れるか……私は今の今からお前のものだ。此心も身體もお前に捧げる。私は眞實心の底から他の女を愛した事はない。全くお前計りを愛したのだ、私の心はいつもお前に向いて居た。誓ふ。御前以外の者からは、眞當の情味を覺えたことは一度も無い。御前は私の幸福の源だ。お前の爲めには我を忘れる。お前ばかりが、此廣い世界に、只一人私に盡して呉れる。呸！崇高い、清い我妻。ジウリアノ。あゝお前ばかりが私の最愛の人だ。其お前に斯うして今迄苦勞させて惨酷な事をした。是を思ふと私は、罪深うて生きて居られぬ。呸！赦されぬ此罪。御前が免して呉れても、私自身が免す事が出来ぬ。何と云ふ罪深い此身、是からの私の生涯を皆捧げてもお前の爲めに盡しても、此罪は決して償はれぬ。ジウリアノ、汝は今の今から私の最愛の妻だ。最早、お前には何事も秘さぬ。心

を總て打ちあける。何卒か私の真心を汲んで呉れ、私はどのような事でもする。あゝ彼の時の事を思ひ出して呉れ。彼の時もお前は病氣で、私が夜晝徹して看護した。其時「シウリアノは此御恩を忘れません」と云つて呉れた御前の心根。何卒彼の時の事を思ひ出して呉れ。彼の時、御前の眼には涙が漂ひ、私が其涙を接吻した。崇高いシウリアノ。彼の時を忘れて呉れるな。シウリアノ。病氣が癒つたら又ギラリラに行かう。彼の美しい景色を見ると、御前の弱い體も直に癒る。彼の樂しかつた昔を今一度復活さう。二人して今一度彼の様に樂しく笑はう。あの私の胸をおどらして、其度毎に、私のハートに新しい力を與へて呉れた、銀の様なお前の微笑。あれをも一度微笑で呉れ。此世に是程美しいものは無いと思つた、彼の下髪。彼の娘々した姿にも一度なつて呉れ。シウリアノ。私等は未若い。失くなつた幸福を再び元に返さう。何卒其氣になつて呉れ……」

斯う云ふ様な事を、私は心の中で叫んだ。が一言も口に出すことは出来なかつた。私は眞底から、痛恨に堪えず、涙にくれて居たのであるが、其でも此痛恨を口に出す事は出来なかつた。其場の光景が急に迫つて居て、反例云つても充分にシウリアノの心を落ちつか

せる事が出来ぬと断念めたから。私に其時、此懺悔を云つたところで、妻は只其苦しさをな唇に、僅かな微笑を浮べて答ふるに過ぎなかつたであらう。吁！其微笑！其頬笑みが語るものは只「ハイ。貴方が私を苦しめない様になさる御心根は、よく分かりました。が貴方は御自身を制して下さいませぬ。御自分の悪い情にまけて何物をも破つておしまひなされる。御託言を聞いても、其がいつも、私には貴方のお弱ひのが見え透くばかりで却つて却つて心細くなります……」と云ふ様な氣がする。私には仕うしても其の時左様思ふ外はなかつた。

其日は、私は、沈思の中に過した。其次の日も、種々の感慨に沈んで、臆氣ながらに決心したが、又一言も口に出す事が出来なかつた「若し汝の真心が、シウリアノに返つたとすれば、汝を今迄腐敗させた情婦から、全く遠ざからねばならぬ。あらゆる痴夢を去らねばならぬ。汝に其力があるか？」と何處かで問ふ聲がする様だ。「何！」と私は、心の中に確りと、答へて見る。次の日も、次の日も、私は願つた。何事か事件あれかし。私の此決心を明白にする様な事件あれかし。と私は只もう決心するばかりであつた。私は又、此決

心から起つて来る美しい想。ジウリアノと新生涯に這入る。散つた花を再び美しくう咲かせる。身も心も溶ける様な響に、再び酔ふて見やう、など色々新らしい夢を想つて楽しんで。

「吁！ギラリラに又行く。彼のギラリラ！彼處には、私とジウリアノとの蜜の様な、甘い想ひ出がある。此度又行かう。小供のマリアとナタリアとは、バチオラの叔母様に預けておいて。柔かな温い日。病後の妻が、私の腕に凭り添つて、静に歩む。歩むは二人とも知つて居る。美しい過去の幻想が泉の様に湧く。二人の顔には、御互に、少し羞し相な色が閃く。一寸眸をそむける。半ば微笑む……何とも知れぬ美しい夢に酔ふ。此様な事も爲た。彼の様な事もした。御前覺えて居るの？と云つて、あらゆる新婚當時の甘い甘い、想ひ出を強める。お互に最早堪らなくなつて腕と腕とを堅く交はして、唇を合はせる……長い長い接吻。二人の血はどどつて、絶え入るばかりになる。あらゆる愛の名を囁く。……其折ジウリアノは目を見開いて、私の顔を凝視する。其刹那、今迄の、不和のいまはしい衣が、跡かたなく脱げて、美しい永遠を契る……」

殊に、ジウリアノがクロ、ホルムの魔酔のもとに、醫者の手術を受ける朝の私の心のせつなさ。妻は今にも死にはせぬかどさへ案ぜられた。其が丁度呼吸が絶える時の様に、身體を少し動かして、二度も三度も私の方へ手をさしのべた。私は居るに堪えず、其室を出た。

身を断たれる様な二時間と云ふもの、私は別室で、恐しい想像に責められて、堪えられぬ苦痛を忍んだ。醫者の手術を受ける……鋭いナイフが妻の肉を貫いて裂く……此凄光景を想像したのは勿論だが、其よりも、ジウリアノの心の真底……總女と云ふ者の持つ感情の、一番尊い、柔かな物を、私が破つて終つたと云ふ様な念が痛切に、絶間なく私を悶へしめた。

再び病室に這入つて見た時、ジウリアノは未だ昏睡の状態で、死人と變りなかつた。實母は非常な心配で、絶えず不安に驅られて居たが、手術は好首尾であつたと見え、醫者は微笑を漏した。ヨウドホルムの香が室内に満ちた。隅の方では、英國生れの看護婦が、氷嚢に氷をつめて居る。助手は早繻帯を巻きかゝつた。室内がだん／＼整頓されて、暫く安

堵した。

ジウリアナは、夢に呆けた様に睡眠に沈んでしまった。少量の熱があつた。日が暮れかゝる頃、急に痙攣が起つて来て、非常な苦痛に落ちた。阿片を用ゐたが、効果が無い。刻一刻に激うなつて行く苦しみの惨状に、私は、絶望と、恐怖に満たされ、一瞬毎に、其死を待つ有様であつた。仕うもする事も出来ず、只其苦痛を領つて、自分も痛む他はなかつた。

が次の日は稍心地よげになつて、其からひき續いて快方に向つて呉れた。

私は、妻の介抱を、決して忽にしなかつた。而して種々の動作や、言葉で、私の改心を妻に示さうとした。が白状すれば、要するに未、ジウリアナの「兄」たるに過ぎなかつた。

ジウリアノを慰める爲めに、病床の側で、面白い小説を読み聞かせる折も、其小説の文字が、情婦の手紙を思ひ出させて、心は遠くジウリアノから隔れて居た。

或日實母は、ジウリアノの病室に、私が居る時、這入つて来て、

「病氣が快くなつて、歩ける様になつたら、皆と一所に、バチオラに行きませうね。——

ね、ツリオ」

と云つて、私の方も顧みた。

ジウリアノも私に眸を向けた。

私は躊躇せず、

「行きませう。御母様。而してジウリアノと私とは、ギラリラに行きますよ。」

ジウリアノは、私の方に向いて、嬉し相な眸を凝した。而して微笑むだ。——其微笑が、丁度小供が褒美を貰ふ時の喜悦のやうで、妻の純無垢な心を惜氣もなく、彰した。何か遠い物でも望んで居る様に、臉を垂れて、無邪氣に私の方ばかり見て居た。

其美しさ——私は其瞬時、我を忘れて居た。仇氣ない、妻の所作の心ゆくばかりなのは、絶えて此世になからうと思つた。

無限の喜悦が、妻と私の體を、透き徹した様な思はれ、私のハートは、豊かな波に満たされた。妻は枕をさゝえながら、寢床から半身を擡げ、崩れた、黄金色の髪の間から、殆ど天女ではないかと思はれる程の、崇高い顔を、私の方に向けた。半身を支へた手は、敷布

と差別ない程の白さ……。

私は其手を取つて——此時既に、私の實母は、扉の外に出て居た。——優しい聲で、

『ギラリラに行かうねえ。』

弱は弱はしい妻は、

『は……』

二人は只黙した。黙したは言ふ言葉が無いのではない。此刹那の美しい想を黙つて樂しまうと思つたからである。妻も私も心の奥に、深い歡を覺えた。只酔つて居る。夢見て居る。語れば夢は醒める、語らずに手を取つて、深い深い夢に落ちる。永久に酔つて居たい。

其日は暮れる迄病室に二人で居た。時々書籍を出して、同じ行を一人して追つた。書籍と云つても大抵は詩集で、私等は、其詩句の、實際の意味よりは、^{いかに}深い意味を加へて、共に讀んだ。口にし得ないと思ふ事の感じが巧に詩句に現れると、私は爪でその詩句の下に線を引いた。

和らかくもゆる麗はしき眼をたよりに
震ふわが手を、ああ、御手にまかせて
ひたぶるに進みゆかん、昔しげき徑も
巖、石塊の道を遮るとも、なごかためらはん。

げにわれは進み行かん、一筋に、静かに世をば……

(福田夕映氏譯)

爪を曳くの跡の深く刻まる、儘に、妻も静に讀んで、讀み終へて、暫くのあひだは枕に頭を支へ眼を閉ぢ、見えるか見えぬ程な微笑に唇をふるはした。

汝れ親愛よ。微笑よ。

汝こそこよなき教なれ。

正實やかにして勇猛のいとくるはしき教ならずや。

(川路柳虹氏譯)

ジウリアノの胸の邊の衣が、呼吸と共に揺れた。枕の中や、敷物の中に入れてある鳶尾の根の、ゆかしい匂が、云ひ知れぬ良い心持を與へた。私は心の中に、今にもジウリアノが、情に堪え得で、兩の腕を私の頸に巻いて、私も頰に其頰を、私の肩に其口を押しあてゝ呉れるのではないかと待ち受けた。
妻は猶、其優しい、細い指を、頁の上部落して、私の眼のうつり行くまゝに詩の行を數へた。

汝の聲ぞ著るかりき、

かつは愛でられあひにしか、

されど今早隠るひぬ。

嘆に沈むも……

著るやき聲を語りたる

親愛ぞわが生命ども

又その聲は語りつぐ

希望も失せて今日の日は

唯つつまじき

名譽にしを、はたや、

金婚の宴を、はたや。

勝ち誇るなき平穩の

やはらかなき幸福を。

願はくはうたげの響も

つゝましき小歌に

永久の、その聲をこそ

うけいれよ。

そよ悲の僅かなる心にまざる

ものぞなき

(川路柳虹氏譯)

頭を屈めて、私は、妻の手首を把つて、其掌に接吻した。

「何事も忘れてお呉れねえ……」

其刹那、妻は、私の口に手をあて、話を止める様に、

「あら」

と云つた、氣づいて見れば、扉は開いて居る。實母が今這入りかゝつた所、タリス夫人も丁度其處に来て居ると知らせた。シウリアノの顔には、嫌な色が現はれ、私も此様な場

合に、這つて來られるのを、殊の外口惜しく思つた。

「まあ……」

とシウリアノは深い息をした。

「シウリアノは睡て居ると申したら……」

と私は實母に其意を漏して見た。

が實母は、様子で、タリス夫人は既う次の部屋に來て居るから、仕樣ない事を知られた。タリス夫人と云ふは、嫌なお喋りの女で、室に這入つて居る間二三度ギロ〜と私の方を見た。話の折に、實母がタリス夫人に、私が、妻が病氣になつて以來、絶えず親切な介抱を續けて居ると話すと、此のお喋り夫人が即座に嫌な拵へた様な調子で、

「まあ、ツリオ様の御親切なこと。其でこそ理想のハズバンドで御座いますわ。」

と云つた。

何と云ふ嫌な言葉つき。私は悪感に堪えられなかつたので、一寸した口實をつくるつて、其場をはづした。

室を出で、階段を降り様とする時、マリアとナタリアとに遇つた。家庭教師に連れられて来たのであらう。二人の小供は平常の様に私の手や袖に接吻した。姉のマリアの方は、玄關の郵便受から、數通の手紙を持つて来たので、早速取つて見たら、田舎に行つた情婦からの手紙。見馴れた其字體。私は、小供等に見向きもせず、直に庭道に連れて出で、其封を切つた。

手紙は、短い私の情を燃やす事を充分會得して居る。テレサの例の文字が、一言二言、たまらなく私の胸の血を沸かした。手紙の要は、月の二十日か二十五日迄に、平常の方法に依りて、密會をこゝ時間迄ちやんと定めて居る。

此時、私は急な激しい嵐にあつて梢の花が瞬くうちに散つて落ちる様に、ジウリアノに對して築きあげた、今迄の美しい想も夢も、此魔女の怪しい一閃に出遇つて跡かたもなく消えて終つた。今迄の心とは打つて變つた心に我知らずなつた。何と云ふ淺間しさぞ。私は、如何にかして今迄の心に歸らねばならぬと、有らゆる試をしたが駄目。何の事はない、私の足は、知らぬ間に街道を歩き出した。其處等にあつた菓子屋に這つて、甘さうな菓子

を一包、本屋に寄つて、面白さうな小説を二三冊購つた。早夕暮になつた。軒々に燈火がともされる。石の甃んである街道には人通りが繁くなる。馬車が行く。馬車の中から、一寸私に會釋をして行く、華酒な紳士もある。又大輪の薔薇の花束を持つて、戀人を腕にすがらせて、樂し相に微笑み語つて行く、歡樂の人にも會ふ。賑やかな悪酒に酔ひ狂つた様な都會の空氣が私を包んで、情慾の渴望が誘つてくる、醜い劣等な妄想のかすかすが猛火のやうに、非常な勢で、むらがり勃つて、最早堪らなくなつた。テレサの妖艶な文字が頭に浮ぶ。私の總ての慾望は、止め度もなくなつて終つた。

が漸くにして、胸の中の擾亂が靜まつて来た。家に歸つて、階段を登りかけると、急に醒めた心地になつた。彼の數時間前に誓つた、崇嚴な決心が、清らかに澄んで牙えて鮮な形となつて彰はれて来た。可憐な、ジウリアノに對する私の態度が、何故彼の様な、刹那の劣情に浮かされたかと、我れと我が身を責める後悔の念が痛切に起つて来た。丁度詐欺に長けた、奸商が、何か苦情の立てる間隙はないかと、誓約書の文言を、線密に調べる様に、私は、我れと我が爲した今日の行爲を、冷に鑑みても見た。噫、彼の詩を讀んだ時、

私が、何事も忘れてお呉れねえ……』と云つた。其折ジウリアノは、『あれ』と云つた。ジウリアノは全く、私が改心したと思つて居るに違ひない。

が又心の底に、斯うも思つた。「ジウリアノは、眞當に私の改心を信じて居て呉れるのか知らん。彼女はいつもの様に、私の決心を、輕信して居るのではないか知らん？」是迄幾度も、ジウリアノの心に彰れた、唯淋しさを堪えて居る様な微笑を思ひ浮べた。「若しジウリアノが、私の決心を、十分信用して居らぬのなら、今の只一度、情慾の奴隷となつたとして、さう深く彼女を落膽させはすまい。并ラリラの谿に行つて、矢張樂しく打ち解けるだらう。」と此様な考も、何處からとなく起る。すると今度は、ジウリアノの眞底から、悦びの微笑が、眼のあたり浮んで来る。并ラリラの名を聞いて、我知らず動いた彼の唇、彼の無邪氣な眸……何うして私の改心を疑はう。呸、何うしよう。何うしやう。ポケットにあるテレサの艶書が徒に、私の身を悶擾させるばかりだ。病室に這入つて見ると、ジウリアノは、輝いた顔をして、私を待ち受けて居た。而してさも悦ばしさに其眸が生々として、蒼かつた頬に血の氣が漲つて居る。

「ツリオ様、何處へ行つていらつしたの？」

と笑顔で私に聞く。

「嫌なタリスが来たものだから逃げたよ」

と云つた。ジウリアノは、娘々した、みづみづしい笑顔をする。私は市街で現無心に買った菓子と小説とを妻の前に置いた。

「此はわたに？」

と妻は小供の様に喜んで、直に菓子箱を開きかゝつた。其「わたに」と云ふ言葉で、

何とはなしに、昔の記憶が浮んで、密月の頭が懐しくなつた。

妻は美しい菓子を、唇にあて、居たが、食はずと直ぐにもとの儘において、菓子箱を傍にやり、

「今ねえ……今ねえ……」

と云つた。

すると傍に居た實母が、

「ツリオ。ジウリアノは未菓子を食べてはいけないんだらう。其よりか今ねえ……」
と云ひかけるを、ジウリアノが引き取つて、

「今ねえ、貴方の御留守に、醫者が見えて、私は既う全快期だと申しましたよ、木曜日は、床を離れてもいゝんですつて……ツリオ様。十日か二週間の中に旅行も出来ませうわ。」
妻の顔は最早、薔薇の葩の様に艶づいて居る。少し黙つて居たが。

「井ラリラに……」

と云つた。妻は此の他にはなんにも夢見て居らぬ。只私の事を信じて、共に彼の懐い別荘に行き度とばかり考へて居る。私は、心の奥に起つた疚しい後悔の念の爲めに、何となく身を静かにし居ることが出来ず、オドオドと躊躇めいたが、不圖思ひついた突嗟の爲種に、さき程買つて来た菓子盆を蓋に載せてジウリアノの側に近づけた。

ジウリアノは、追及する様な眸で、絶えず私のする事を見て居る。其が何となく私には浦耻かしう思はれてならぬ。「私の胸のうちを悉皆見ぬいたら……。」

實母は、氣の好ささうな顔をして、「突然に云ひだした。」

「ジウリアノは、まあ美人なこと。」

實際美しくかつた。其顔の色が動いて、五六年は若くなつて見えた。實母の言葉に羞かんだ頬の赤らみが其日の夕方迄去らなかつた。

「金曜日ねえ。私が床を離れるのも、最早二日間、私は歩く事を忘れたかも知りませんよ。」

とジウリアノは云つた。最早、全快する事と、田舎行との外は考へて居らぬ。而して頻と、田舎の別荘の事を實母に聞いて居る。

「あの去年行きました時に、私が挿して置いた、魚池の岸の柳は、根づいて居ますでせうかね、ツリオ様、貴方も覚えていらつしやるでせう。二人で挿した、彼の柳の枝？」

實母は其を受けて、笑ひながら、

「ついて居ますよ、最早、立派な柳の樹になつて居ます。フェデリコにも聞いて御覽なさ

ら。」

「眞當？……それから……」

妻は、此様な話迄も、重大な事の様に話す。夢中になつて話して居る。私は、妻がよくも此様に夢中になつて居るかと不思議な位、今度に限つて此様に私を信じて居るのか、と思ふと、又何だか責任を感じる。と同時に、テレサの手紙には、是非をむかねばならぬと今更の様に思ひ出した。

勿論テラリラに行かねばならぬ。現に實母を前に置いての約束だ。どんな事があつても、テラリラに行かねばならぬ。と云ふので、私は今更ながら、テレサの手紙に躊躇した不決斷が耻かしくなり、一思ひに心と定めて、真心の籠つた眸を見開いて、ジウリアノの顔をつくづく慈みの眼ざしに疑視めた。

ジウリアノの美しさが、今更に鮮やかになつた。始めて家庭を持つた時の嬌々とした姿をはつきり眼の前に描き出した。あの頭を思ふて私の愛くるしい娘姿の妻を胸に抱き緊め接吻しようと狂熱的に追ひまはして、幾度も室内の静けさを破つた事などがあつた。ああ想ひ出よ。想ひ出よ。

此時實母が、座にあつた白葡萄酒を杯に満たして、ジウリアノに進めると、ジウリアノ

は、

御母様。最早、私、澤山戴きましたわ」

と云つて、私の方に向き、

「ツリオ様、思ひ出の多い、白葡萄酒ね。」

と胸の思ひを私の眸に流し込む様に凝乎暫くの間見入つた。嗚呼！思ひ出多い、戀の酒は、薄く黄ばんだ色を濼へて居る。ジウリアノは何よりも白葡萄酒を好んで居た。

「懐い酒だねえ、」

と私も云つた。ジウリアノは、細めた其眼の臉を少しふるはして、

「此室は暖いのねえ、私の耳は此様に熱くなつてよ。」

と云つて、兩方の手を耳元にやつて、熱を覺えて居る。床の側の洋燈は輝かに、卵形の其顔の半面を照らし、美しく浪うつた栗色の髪に輝が吸はれて潤みこんで行くやうである。

稍あつて實母も去つてしまつた。女中も行つて終つた。私が一人残つて菓子を喰べて居

るべし、

『ツリオ様。』

と云つて、手を伸ばして、私を引きよせ、私の頬に接吻した。

あゝ此接吻、妻は慥に此接吻で、私に身も心も捧げよ、と要求した。あれ程に謹慎深い妻が、此様にするのは、今迄の事を皆忘れて、私と共に、新しい生涯に這入らうと欲したからだ。是程に私を信じた姿が又とあらうか。此刹那。妹でない、全く妻と變つた。幾度重る接吻の秘密を胸におさめた生々とした妻であつた。其夜私も獨り、居間に残つて、思ひ出した。其は、薔薇の花が咲いて、神秘的な聲がみちた、或る暖い六月の黄昏の事であつた。淋しい人の心は、此様な時、殊に淋しさを感ずる。ジウリアノは、仕うして居るだらうと思つて、行つて見ると、只獨り、窓に凭つて、擴げた本の頁を居に於て、居た。衰へて、淋しく蒼ざめた其頬を見て、『ジウリアノ。』と呼ぶと、驚いた様に、顔を上げた。『仕うかしたかい。』と聞いて見たが、『否、仕うもいたしません。』と答へたばかり。云ひ知れぬ苦しみに壓された様が、明瞭に其擴がつた眼に現れて居た。吁！彼の頃のジウリアノの心は

どの様に淋しかつたであらうと、此様な過ぎ去つた事が、止め度なく浮んで来て、私は、其夜長い間、眠に就く事が出来なかつた。

が、朝になつて、眼が醒めて見ると、又複雑な考へが湧いて出た。テレサの手紙が目につく、直に不安な幻の様な影が、私の全身を囚へて終ふ、手紙を讀む。フローレンスで密會の日は二十一日で、時間も場所も定めてある。二十一日は土曜日。ジウリアノが床を離れるのは木曜日。すれば十九日……テレサに會ふ事が出来ないことも限らぬ。吁！私の決心は、揺がずには居られなかつたが、動いても、決心は決心だ。仕うしてもテレサを忘れやう。と斯う思つた。仕うする？手紙一本で彼の密會状をはねつけてしまはふか？テレサが其を見て、何と思ふであらう。然し其様な冷淡にする理由は、寸毫もない。……私の情は炎の様に燃えて居る。あく迄も、テレサを欲して居る。テレサに此様な慘酷は仕うしても出来ぬ。テレサは私を愛した。深く愛した。未愛して居る。而して私の爲めに種々苦しい思ひをもして居る。私ももとより彼女を愛して居る。二人の強い、熱い愛は、世間の評判で、誰も嫉ましさうに見て居る。或者は、私とテレサの中を裂く、恐しい、有力な戀敵

となつた。其戀敵も私は壓倒してしまつた。私は自問した。「羅馬に、テレサよりも愛すべき美しい女があるか？」私の心の奥底には、什麼に強い力を以てしても、反抗する事の出ないものがある。テレサが思ひ切れるか。あきらめられるか。密會の日が来て、其密會を拒絶することが出来るか。……心の底に、出来ないと言ふ力がひそんで居た。

が起きて、ジウリアノの病室を見舞つて歸て来た時、私の決心は稍力を得た。テレサに拒絶の手紙を書くと言ふ氣になつた。先づ密會には行かぬと言ふ意味を書き、其言譯には種々の事情を發明した。半ば無意識に、私が擇んだ言譯の意味のうちには「テレサが此言譯を餘り信せず、再密會を申込み様に」と望む心がひそんで居た。私は仕うしても、心の底に隠れた力を失くする事が出来なかつた。「實母や、ジウリアノの前で、飽く迄も、裝つて居るもの、此様な心の底があるからに、ジウリアノのする事を疑ひ深く視る。猶、私には、妻の温和な顔に、疑惑の影が宿つて居る様な氣がした。潔白な其顔に、雲が迫る様にも思はれた。

水曜日にテレサから電報が来た。其電報が如何にも私を脅嚇する様に思はれた。「クルカ

コヌカ、ヘンジマツ」私は只「ユク」と返電して終つた。

此様な場合に起る心の發作が、人生の總の決心を支配するものだ。私は行くと言ふ返電してハッキリと心が落ちついた。最早斯うなつては意志の自由はない、只事件の成行があるばかりだ。私は、私の責任や、境遇やを色々考へて見た、而して只歎じた。

「例へ私の行爲が悪いと言ふことを十分意識して居ても、仕うしても是から逃れる事が出来ぬ。正體は分らぬが、大きい力のものが、私を囚へて、自由に居る。私は、慘酷な運命——始常私をあざ笑つて居る運命、克つ事が出来ない運命——の犠牲に外ならぬ。」

ジウリアノの室に這入る心算で、扉を開けかけて見たが、急に私のハートの上に、重い恐怖が落ちかゝつた。私は、扉に手を掛けた儘、ふらふらとした。ジウリアノが、私を一見して、私の心を、観破する！」に違ないと思ひながら私は震へ戦慄した。いつそ這入るまいかと踵を返す刹那、妻は聲をかけた。

「ツリオ様。貴方なの？」

其聲の優しかつたこと——。

扉を開けて一足這入る。ジウリアノはニツコリ笑つて、

「ツリオ様、如何なさいましたの。御病氣？」

「あゝ頭がふらふらしたが最早癒つた。」

と私は答へた。心の中に「妻は決して疑はぬ」と思ひながら。

ジウリアノは、不思議な程無邪氣で、私の心の中を秋毫も悟つた風が見えなかつた。

あゝ私は慘酷なことをする。磊落に明白に事實の儘を語つて終ふか？ 虚言にしやうか？ 其とも黙つて行つて終つて、後で懺悔の手紙を書かうか？ 仕うしやう。仕うしたら此事件が私に苦痛が少く、ジウリアノに落膽が少くなる事が出来るだらう。

疚しい事だが、此窮地に立つた場合に、又もや例の自分勝手が出て來た。まあ自分さへ苦しみを逃れれば宜い。ジウリアノは其次だ。と云ふ考になつて終つた。實母さへ居なければ、私は黙つて行つた後で手紙を書くのだけれども、左様は行かぬので、矢張此處で妻に心の中を話すとしやう。と斯う定めると、何處かでそのかす様な聲がする。左様だ。磊落にあつた萬事を語るさ。大いに泣かせて、大に笑はせるのだ。さうだ。彼女の胸を抱

いて接吻してやつて、其から話して見るさ。大丈夫。彼女の心を安んぜられやう。

今迄此様な態度でもつて打ち解けて、上手く事件を済ませたのも度々であつたがど考へて居ると、六つた。

「ツリオ様、何をそんなに考へていらつしやるの？」

と云つてジウリアノは手を擡げて、私の盛めた眉と眉との間に指を押しした。悶へる事をやめよ、と願ふ様に。私は其手を把つて一語も語る事が出来なかつた。此沈黙の間に私の心に定めた態度を改ためる餘裕がなかつた。何も疑はぬ、馴れ馴れしい聲や、愛らしい身振が、全く私を溶かして終つて、私は、泣き度くなつた位——泣いて慰める、呸！私も泣いて慰めて貰はふ——と優しい氣の起る刹那、又も新しい魔の力が私に味方した、——其涙を利用せよ！涙のみ見て語らずに置け。女と云ふ者は、愛する男の涙を見て、實に心を痛めるものだ。さ、最少して涙が流れるぞジウリアノが、其涙を見て泣くに違ない。早く能ふ限り早く、痛切な悶えの頂點に達した様な風をして泣いて見よ。さうして明日になつてから愈々事實を語れ、左様するとジウリアノは、必ず昨日の涙の故を其と悟つて、罪は

深くとも同情する。自分勝手と見る代りに、何か強い、意地悪い、運命に犠牲なされた哀れな者と見て呉れやう。心だけは清いものと思はれやう……

「何か心配事でもありませんの？」

聲は低いが、夫を思ふ懸念の情を置めてジウリアノは私に覗き問ふた。

私は自づと頸垂れてしまつた。此時ばかり私の心が動いた事はなかつた。而して今迄出さうと思つて居た涙が止つた。呟！泣けぬ……小供らしい悲しい、又猜い想までして、加之も笑ふ事の出来ぬ失望をした。が又魔の力は、何故躊躇する。是程よい機會はないではないか。此時泣けば何んでジウリアノが疑はう。深い愁をして涙を流せ。今が一番効力があるんだ、と云ふ。

「ツリオ様、何故返辭をして下さいませんか？」

とジウリアノは緩く私の額を撫ぜながら問ふ。

「私ですもの、何も打ちよけて下さつても宜いでせう。」
と云ひ足した。

眞實私はその折シミジミと妻の親切を感じた。

實母さへ是れ程に私を慈しむたことはなかつた。

私の眼は自づと濕つて、熱い涙が頬を傳つた。(云ふに忍びぬが、事實だから白状する。人が感動した場合の美しい感情を、今の場合の様に汚して終ふは、強ちに私ばかりではあるまい) 私は、涙を止めなかつた。のみならず、此の機をと思つた。故意と顔を上げて、涙に濡れた頬を、ジウリアノに示した。夕暮の暗では、涙が見えぬかと、一二分間は氣づかつた。猶、ジウリアノの注意を引く爲めに、深い太息までし、泣くのを堪え忍んで居る風情をした。ジウリアノは、顔を近づけて、私を凝視つた。然し私は沈黙の儘であつた。

「仕うかなさいましたの？」

と、再び問ふて、つくづくと私を見たが、不圖、兩手を延して、亂れ心になつて私の頸を抱きついた。

「あれ。涙が……」

と叫んだ。其顔は震へて居た。

悲痛に堪えぬもの、様に、私は忙がしく妻の抱擁を脱して、さながら逃げ場を求める様な風をした。

「ジウリアノ。離して呉れ。」

と云ひながら私は病室を出た。

室を出て私は、私自身を嫌に思ふ心が満ち満ちた。

明日は病人が全快すると云ふ楽しい日である。私は再び妻の病室に歸つて例の通り妻の側で晚餐をした。實母も這入つて来て、

「ネ、ツリオ。明日はジウリアノの床上の日だね。」

ジウリアノと私とは偷み見る様にして微笑だ。それから明日は、何時に床を離れるの、仕うして祝ふの、と、小さな事迄興味をつけて三人話しあつた。私は、實は、絶えず病室に居て話しをして呉れる様にと、心の底に願つた。

が實母は一寸と云つて病室を出た。ジウリアノは、其を機會に、私の方に向つて、
「先刻は仕うかなさいましたの、何事も打ち開けて頂戴な。」

「否、何でもない。」

「だつて、あんな事があつては明日が楽しくなりませんもの——」

「話してやるとも、然しまあ其事は今は忘れてお呉れ。」

此時實母は、二人の小供を連れて這入つて来た。ジウリアノの此言葉で見れば、寸毫も私の心を知つて居る模様がない。では私の涙を仕う思つて居るんだらうか。今迄私の行つた不埒を後悔して居る涙と見て呉れるのか知らん、其とも罪深い私が、今更懺悔するにも胸に迫つて来るのは、涙ばかりだと云ふ、其涙に解して呉れたのか知らん。

次の朝は、照り輝いた、楽しさうな日であつた。ジウリアノの願ひで、私は病室の隣の間
に座つて居て、ジウリアノが呼ぶ迄は、待つて居て呉れとの事。

「ツリオ様。御這入り。」

扉を排けると、病室前よりは、脊高く見えるが弱々し相なジウリアノが立つて居る。

長い着物の流れる様に、寛濶としたのが大きな裾となつて、其足を蔽つて居る。堪えきれぬ程に頬笑ひで、體の平均を取る様に、兩手を稍のばし、暫の間、私の方に眸をすえて

居たが、聽て實母の方へ轉じた。

實母は溢れるばかりの悦ばしさと、慈しみて其華酒な姿を見て居たが、手を伸ばして、仆れんとするジウリアノを支へようとする。私も知らず知らず兩の腕をさし伸べて居た。ジウリアノは、

「いえ、いえ、仆れ やあしませんよ、斯うして獨りであの肘掛椅子まで行つて見度わ。」と云ひながら注意深く、用慎して一足進んだ。其顔には、仇氣無い小供の様な、喜しさが輝いて居た。

「静に。ジウリアノ。」

妻は二足、三足と危く歩いて見たが、急に苦しみを覺えて、實母と私との間に、躊躇とする。私の腕に其身體を投げかけると、私は胸に絆と抱く。妻の全身の重さは、私に懸つた。呼吸は激しい様であつたが、それでも満面に笑を漾へて、私に固く抱き締められた。其呼吸の暖さ、其肩のしなやかな、私は其髪のを、酔ふ程に身にしめた。頭の上のあの二つの可愛い黒子も、元の儘であつた。

「ほんとに私驚いてよ。仆れたと思つたわ。」

とジウリアノは、半ば喘ぎ、半ば笑つて云つた。

ジウリアノは、私の抱き緊めを解かうともせず、母の方を振り向いた。其横顔には、痙攣が彰れて、病後の疲れが見える。が、昨夕の思ひがけない、愛情の溢れた接吻を思ひ出すと今更に、妻の顔は愈々美しくう見へる。

「ツリオ様。肘掛椅子まで助けて行つて下さいな。」

私は、ジウリアノの脇を支へて、静かに歩ませ、一番柔かさうな座蒲團を椅子に載せ、頭を置くあたりには、殊に心地よさうなのを撰んで、安樂に椅子の上に腰かけさせた。其上妻の弱は弱はし相な足の下にも蒲團を置いた。ジウリアノは、いつかの夕べと變らず、絶えず愛くるしい眸を放つて、私の爲る事を、一々視て居る。私は更に小さい卓を、其前に運んで、其上に新しく挿した花瓶と、新刊雑誌と、頁を切る小刀とを置いた。此様な親切を盡す私の心には、什うやら我と我が情を欺く氣持がせられてならなかつた。すると又例の嘲笑ふ様な聲で、「大にやれ、やれ、母の前で此様な親切を盡すのを什うし

てジウリアノが疑はう。まあ愛情のあるらしいこと。猶あるらしく見せてやれ。ジウリアノに観察力があるものか。そう。此好機をだ。やれ。素敵にやれ。」と何處やらで云ふ様に思はれる。

「眞當に居心の好い椅子ね。ツリオ様。有難ふ。」

とジウリアノは、さも満足したらしく吐息して、斯う云ふのであつた。間もなく母は、ジウリアノと私と二人のみ残して、出て終つた。妻は更に深い情に動かされた様子で、

「ツリオ様、有難ふ！」

と云つて、把れよと私に向けて腕をさし出した。寛濶とした其袖は、伸した腕を傳つてすべり、肘より下があらはに映じた。純白な忠實な其腕！愛、感謝、平和、夢、あらゆる満足にも世も忘れた姿をして居る。浮いた様に爪と、目の邊に美しい表情を見せられて、私は何か、嚴かなものに近づく心地が禁せられなかつた。

今も私は信ずる。私の臨終の床に就いて、彼の世に去らうとする、斷末魔の折には、必ずあの崇高い、清らかな姿を思ひ浮べて、他の記憶が薄れて消え行く其中に、其影が明瞭

と永遠に残るであらうと。

彼の時を思ひ出すと、私は、今でも心の平均を亂される様な氣になる。其瞬間に、私は目前に現れた、嚴肅な姿と、將に來るべき事件の、最重要なる事とを慮かる恐れに満たされた。心の裡では、明に、二つの力が、こんがらかつて居た。一つは、ジウリアノの姿を見て、私の行爲の慘酷さを、痛切に感じ、何故に何故に此行爲を止める様な天賦を、さづからずに生れて來たかと云ふ恨めしさと、猶一つは、矢張例の我利我利で、何とかして、此慘酷の私の行爲を軽くする方法は無いかと云ふ、悶搔きとであつた。此の二つがもつれあつて私の心を雜ぜかへして終つた。

決斷の時は廻つた。明日私は行く。ジウリアノとの感情は、最早是以上暖かにはなりえぬ。なるべく此事件を、急激に見せない様に、今のうちに、母に明日出かける事を知らす必要がある。左様して置けば、兎も角も皆の驚きを軽くする。其よりは第一にジウリアノに知らせねばならぬ。が之を云つて、妻が苦痛と恨めしさとの餘りに、仆れる様な事はなからうか？實母に事實を打ち明けはすまいか？さもなくなつても、再び永遠に沈黙して終つ

て、憫れな、冷やかな、犠牲と自らなり、折角開いた愛情の花を、又凋ませて終ふのではあるまいか？

最後の際迄私は煩悶した。最初の言葉で、ジウリアノは悟るであらうか？いつそ只出かけるどばかり云つて置かうか？何處にと聞かれたら如何しやう？所詮は分るに違ひあるまい。あの口達者のタリス夫人が、喋らぬとも限らぬ……

最早堪えられぬ。胸の中では、張り裂けるばかりに、「何うしやう」、「何うしやう」、「が暮つて来て、持ち堪えられぬ。突差、網が張り断れた様に、言葉が唇まで出かけたので、云はうとする。ジウリアノは、他の話をして居る。何とかしてジウリアノの話の機が、私の方に向きはせぬか……。

ジウリアノは、平常より快活に、種々將來の事を語つて居る。心の中に、華やかな希望を抱いて居るのは勿論であるが、其時は殊にジウリアノは、快活に満ちて居る様に見えた。私は妻の椅子の後にゐて居た。強いてジウリアノと眸を合はせぬ様にして居て、窓掛を引いて見たり書架の書籍を並べ正して觀たり絨氈の上に散つて居る薔薇の花葩を拾ひ集め

て見たりした。妻の髪の漣の様に梳られて居るのや、美しい曲つた睫の端、呼吸毎にゆすれる胸の邊の衣、殊に其腕——美しい白い肘掛の上に休んじて居る。病床であの腕の白さが敷布の色と差別がないのをつくく疑視めた時から、未一週間とはかゝらぬが最早私の心は妻から遠くなつて居ること——

私は只妻の後にゐて居る。神経は愈々嵩じて、身體の震えるのを覺えた。而して何んぞなく妻の頭上には、鋭い劍が逆に吊つてあつて、今にも其網が、断たれような危い運命が迫つて居る。薄暗い悲惨な雲が、ジウリアノを閉して居る姿が見える。私の心臓には又も痛い、苦しみの矢が貫き徹された。

最後が来た、ジウリアノは、私の方へ向いて、

「ね、ツリオ様。明日私が少しは癒くなつたら露臺に連れて行つて下さいな。漠々とした所で空気を吸つて見度わ。」

私は一言。

「明日は出る。」

ジウリアノは驚いた。私は猶すかさず。

『私は他所へ行くよ。』

私はなるべく言葉を柔に云つた積であつたが、恐怖は胸に波打つて居る。犠牲を殺すに
もう一太刀で呼吸の根が絶つと云ふ凄い感じが背と迫つた。

『フロレンスに行く。』

『あ！。』

と云つて、ジウリアノは、直に悟つた。而して激しく身體を動かして、肘掛椅子の上に
全く位置をかへて、正面に私の顔を見上げた。

『ジウリアノ』私が發し得たは只此一言。私は身體をかゝめて、妻を抱いた。其時妻は、
蒼ざめて、絶えいるばかりの息づかひであつた。

臉を塞いで、痙攣に震えながら、妻は後に凭り倒れた。寒い風にあつた様に、身をブル
ブルさせ、一二分間唇を固く緊めて、僅に手を動かすばかり、其白い頸には、動脈の搏
つのが一際明かに怖ろしく見えるのであつた。

罪惡——、私が生涯始めて犯した罪。最も慘酷な罪——、

私は非常な酷い心で家を出た。家を出てから一週間。歸つて來た折の二三日、私は、私
の慘酷な鐵面皮なのに、心の奥底から耻ぢた。總ての道徳心を、根こぎにもいで、何とも
思はぬ惡魔が、私を抱き、私の手を取りて、酷薄非道の塵溜りを掻きまはさせた氣持がし
た。がジウリアノは、再び驚くべき自製の心を以つて、あらゆる苦痛を内に堪えて居た。
あゝ其嚴かな沈黙。例へば金剛石の甲冑に保護されて、あらゆる、あらゆる非道を、忍ん
で居る姿であつた。

ジウリアノは、二人の小供を連れて、母と一所に、ラ、バチオラに行つて終つた。兄も
同道であつた。私が只獨り羅馬に残つた。

其日から私の生涯は暗黒破滅の境に這入つた。振り返つて見れば、憎惡に滿ち滿ちた、
此過去の慘狀、私は痛哭せずには居られぬ、我自らを穢い者に思ふ心は、人間のあらゆる
鄙猥、醜惡の澱滓を掬つて、疲れた、情の荒んだ、絶えず物に激動する肉塊となり果て
た。或時、疑ひの魔光に炎やされて、激しい嫉妬の肉が爛れると、あらゆる良心の泉は溜

れて終つて、只々勢鋭ごく、私の根本から捧げて、悪魔の脚下に落ちて跪座くのであつた。

其時分程、テレサが私を迷はした事はなかつた。墮落の底だとは氣付きながらも、テレサの美しくしさに酔ふて、只其れのみを憧憬れた。テレサは私の情を漲らせる爲めには、何の様な野卑なことも、顧みなかつた。限りない苦痛と、汚れた快樂とは結びついて、自重の心など云ふものは微塵もなく、穢い情の發現を眼のあたり赤い顔もせずと悦び迎へた。餘りに酷く墮落のどん底に墮ちたので、呆然と五六日間も過した事もあつた。私の家庭に取つては、全くの他人となつた、ジュリアアの妻が、眼につくと、私の心が苛立つので、一週間も互に口を利かずと過すこともあつた。時々妻の蒼い顔や、苦しい表情を見て刺撃する事もあるが、何分私の頭が狂つて終つて居るので、少しも事を行ふことが出来ぬ。妻がどの様にして日を暮して居るかなど云ふ事は、勿論知らう筈は無い。最早妻が付うならうが一切構はず、妻に就いては、不安も心配もありはせぬ。なんだか説明は出来ぬが、堅い壁が妻と私のハートを隔つて、妻に對して何んでもない事を怒り、妻の笑ひ聲を聞く

と實に癩に觸つた。

或る日のこと、扉を隔てた居間で、

che faro seurya Euridice ?

(エウリデースと離れて何だのしかるう)

と歌ふ聲が聞えた。慥にジュリアアの聲だ。吁、久しぶりに聞く歌だ。一體什うして奴は此様に快活になつたのか。癩だ。加之も愉快さうに、室内を徘徊しながら歌つて居る。私の心臓はむかついて。什んな顔をして浮かれて居るのか？と私の心は攪き亂されて、思はず妻の名を呼んで近づいた。

私が扉を開けて這入るのを見て、暫く妻は撲たれた様に、沈黙になつて終つた。而して驚いた様な、疑つた様な顔で居る。

「謳つて浮かれて居るんだな。」

私は何も言ふ事がないので、随分無様にも斯う云つた。云つた後、餘りの無様に驚いた位。

妻は何と答へてよいか一寸當惑した様にニッコと笑つた。而して其眸の中には何だか厭な好奇心……氣狂人にでも對する時のやうな同情……を宿して、何んとも云へぬ輕蔑がある。ふと見ると目の前の鏡臺に私が映つて居る。肉の落ちた顔、窩んだ眼、腐れた様な唇。まこと慘鼻に堪られぬやうな數ヶ月に亘る荒煙の跡がまざまざと映つて現はれた。

「何處かに行かうと化粧して居るんだらう？」
 と私は又無様な口調で云ひ放つた。私は別に云ひ度い事もなかつたが、さうかと云つて黙つた儘で居られなかつたから、其の場に劍突のやうな惡魔の言葉を云つたのであらう。臆病からする無様に他ならぬ。

「はい。」と妻は答へたきり。

十一月の朝の事で、ジウリアノは、雑多な化粧道具が散らばつて居る卓の側に、黒い羊毛織の着物を纏つて、手には銀の縁の取つてある籠甲の櫛を持つて居た。其飾り氣の少しもない装ひが、瘦形のジウリアノに、如何にも相應しがつた。卓の上に挿してある菊の花の白い大輪が、其肩の邊に、一きは鮮かに映つて居た。セントアルチンの夏。(十一月

中頃の事) 光りは窓から流れ込んで居て、室には得も云はれぬ香氣が満ちて居た。

「何んな香水を使つて居るね？」

と聞く。

「クラブ、アップルを。」

「左様か、良い香だねえ。」

妻は卓の上から一瓶の香水をとつて、私の手に渡して呉れた。私は其香水を長い間嗅いで見ながら、何か外の事を語らうと考へて居る。が幾程考へても、私の心のまごつきは去らぬ。さらばとて捨鉢にも出られぬ。二人の間には家族と云ふ觀念さへ没して終つた。妻は仕うしても元のジウリアノとは思へぬ。其間にもオルフィウスの歌が耳の底に残つて居て、絶えず私を唆る。

the fano souya Euridice?

歳の暮近い黄金色の日光が、室内に満ちて、種々な化粧道具に反射して、何となくまこと女性のやわらかさを讀へると云つた様な匂が溢れて居る。而して此古い歌の調が、心の

奥底に潜んで居る生命の動悸を呼び起す。今迄暗く影さしたものが、漸々に薄れて明るくなつて行く様に思はれた。

「御前の謳つて居る歌は何と云ふ懐かしい歌だらう。」

と私は心のうちに自づと起つて来る感じに降服してしまつて斯う云つた。

「左様。」とジウリアノは答へた。

此の刹那、妙な好奇心で、「仕うした理由で歌つて居るの？」と云ふ問ひが大方唇まで出たが云はなかつた。而して仕うして此様な妙な好奇心を起したかを考へた。

沈黙の間が暫く続く。妻は親指の爪を、手にした籠甲の櫛の齒の上に走らせて、爽かな音をさせた。(其音が今も明々と耳に残つて居て永久に消えぬ。)

「最早お化粧は済んだのかい？是から何處かにお出遊びと云ふ段取だな、」

「ハイ、短衣を着て、帽子を冠ればいゝのよ。然し幾時でせう、」

「十一時過ぎてる。」

「もう其様になりまうの。おや、おや、」

と云ひながら、急がしく帽を冠り、ヴェイルを掛けて鏡の別に立つた。私は凝視した。「何處に行くのだらう？」と云ふ問が唇迄出たが、私は云はなかつた。此場合、斯う問ふのが自然であるのだから、黙つて終つた。

黙つて凝乎と見つめて居ると、忽ちジウリアノの神々しい美しい姿が明瞭と映する。——若い美しい淑女、羨の善い優しい心。伸び伸びとした其身體。輝く様に凜とした其精神。一言につくせば最も人を引きつける崇い女性。理想的な妻……

「何處にジウリアノに缺點がある？」と不圖斯う思ふ刹那、私の心の中には、「此様な淑女が戀ひされずに居る筈はない、私は此淑女を放つて置く、此の淑女の心は果して孤獨か？過失は無いか。戀人はありはせぬか。ある。此様に化粧して居るのでないか。呶々妻も其若さ、美しさを犠牲にするを無意義と思ふ様になつたのではあるまいか。私の爲めに永遠に葬られる愚を悟つたのではあるまいか。私よりは優れた紳士を見出だす。其の紳士と堅固に美しい戀に耽ける。其戀が私の様な墮落者を全然忘れさせて終ふ。ジウリアノの心を全く奪ふ。自分は何悔ゆる所なく今迄傷つけて居たが、今其を全部失ふ……」斯う思ふ

と急な怖れに私は震へた。私のハートをグッと振られる気がして、「エ、いつそ此疑惑をつきとめやうか。ジウリアノを真正面から見下して、「御前は純潔か？」と問うてやうか。ジウリアノは虚言が云へぬから真相は直に判る。……何……虚言が云へぬ？……女に油断をするな。女——魔……忘れるな。貞操の衣の袖の蔭には戀人が幾人も潜んで居ぬとも限らぬ。ハートを捧げる、犠牲となる……畢竟するに、虚偽な言葉かも知れぬ。真相は暗諳として居る。病後とは云はず、病の以前にもジウリアノは全く純潔であるか？油断は出来ぬ。真相を撥け！」呷々此の毒々しい心の叫び、(真にテレサの毒に、私の心も身も浸つたのであつた。)……私は胴體を震はしたのである。

「あの、ツリオ様、此の針で面衣を留めて下さいまし。」

ジウリアノは羞しさうに私を見て云ふ。面衣の端を取つて、額の所まで腕を上げ、指の尖で頻りと針を留めやうとして居る。其雅やかな姿……真白な指、私の心の中には自づと「あゝ久しい間、あの胸と抱き合はぬ。私が何の様な不身持をしても、何とも思はぬからと云ふ風で、何遍も温い握手をして呉れた其掌……其掌は他人と握りあつたのではある

まいか？」私は黙つて針で面衣を留めてやつた。が其間にも純潔を疑ふ心が絶えず嫌な想をさせた。

又妻が短衣をつける間も手傳つた。

二三度馳せる様に御互の眸が會つたが、其眸の裡にも心持の悪い影が離れぬ。妻が心の中、「ツリオが仕うして来たんだらう。何で此様に變つた身振りをするのだらう。是には何ぞ意味がなくつてはならぬ。私を仕うし様とするんだらう？何か事でも起つたのだらう」と問ふて居る様に思つた。

「では一寸出て参りますよ。」

と云つてジウリアノは、扉を開けて去つた。家庭教師のエデス夫人を訪問するのかわ知らん。

私は只獨り残つて居ると不圖寫字臺の上に積み重ねてある手紙や書籍に目がついた。一通り其手紙の封書を見た「親展」と書いてある字がひどく私の眸を牽いたが、強いて手紙を見なかつた。古代革で美しく表装した小説に銀の菜小刀が挿んであるのがある、大方先

迄ジウリアノが読んで居たのであらう。手に取つて見ればアルポリオが最近の小説「秘密」で、何思はず表紙を開けて見ると、著者の筆蹟で、「ジウリアノ様へ。親しきを希ひて。千八百——年聖日。アルポリオ。」と書いてある。

ではジウリアノは、あのアルポリオを知つて居る？すればどんな態度を取つて居るか？私は二三度會の席で彼の小説家を見た。其時の磨かれた様な美くしい人を引きつける顔をしひ出した。至つて女に持て讀される作者で、其小説は、巧妙複雑な心理解剖を事とし、細々と機微に觸れて穿つた其筆が、讀者の心を根本から動かして、全然魅し去ると云ふので、素的な評判を博した文壇の流行兒だ。今迄彼が出版した澤山の小説は、何れも白熱的な情味を謳歌した物で、炎えたつ熔爐の中に讀者を溶かさうとする、作中の人物は、何れも何れも、情熱の爲めに大膽な悲劇を敢てするものばかりである。

此の異常な天才の作家の手になつた小説は、現に酷く私の心を動かし、思想を激變させた。其著作の一つは私が非常に愛讀したものではないか。其作中の人物の幾人か私自身と寸分變らぬ性格煩悶を持つて居る。私等夫婦が、此様になつたのも、元を辿れば此の作家

の思想から起つて居るのではないか。ジウリアノも此作家に感化されたのではあるまいか。

先日來の妻の行爲に思ひ當らぬ節がないでもない。

妻は再び扉を開けて這入つて來た。私の其小説を持つて居るのを見て、一寸狼狽て頬笑んだ。其頬も薄く赤かつた様にも思はれた。

「什うかなさいましたか？」

と妻は聞く。

「アルポリオを御前は知つて居るのか？」

と私は出来るだけ平氣に靜に云つた。

「ハイ」と事もなげに妻は答へて、

「モンテリシスで紹介されました。其後二三度家にも參られましたか、丁度貴方が御留守の時ばかりで……」

「何故其を私に以前知らせなかつたのだ」と聞いてやらうと思つたが辛うじて口には出さなかつた。強ちに自分を顧みては、彼の様に妻を疎遠して居たのに、什うして自分に知ら

せる機会があらうかと強ひても顔いて見た。

妻は静に手袋を着けながら、

「此の小説は大層細かに描いてありますのねえ、貴方、未御讀みになりませんか？」

「あ、讀んだ。」

「面白いでせう、」

私は考へる暇もなく、只、妻よりは豪いぞと仄めかす本能的な言葉で、

「何。平凡なものさ。」

暫く互に黙つて居たが、

「一寸出て參りますから、」と云ひ残してジウリアノは又去つた。

妻の後について私も扉を開けて出た。玄關まで行く間、妻の跡に残る有るか無きかの香水の匂が私を包むだ。玄關番の居る前で、一寸私を顧みて、「では、」と云つたきり。輕やかな足どりで街道へ出た。

私は急いで書齋に歸つた。窓の戸を開けて、窓框に凭りすがつたまま暫く街道を行く妻

の後姿を凝視めた。

妻は例の輕快な步調で、鋪石の上を日に照らされながら、正しい姿勢で、右も左も振り

向かずと歩いて行く。十一月の日光は、水晶の様に澄んで稍空を黄ばめて居る。心地よい

秋の温かさ、花は最早無いが、紫堇の名残の聲が濛つて居ると思はれる。

此時際しない私の荒廢がシミシミと感ぜられた。而しし段々と重い物が胸を壓して來る

様で、刻一刻と堪えられぬ様になつた。私は生涯を通して、此問題程苦しんだ疑はない。

今迄ジウリアノを信じ切つた事がポロポロと碎けて消える。吁！彼の堅固であつた信頼、

其が夢の様に不慥になる。私の靈は全く絶望の聲を放つた。が疑は仕うしても其を認め

る事を欲せぬ。疑を仕うかして打ち消し度い。

私は例の我利主義に根ざして居るとは云へ、長年の間私の良心を托した信條と云ふの

は、即ち私が道徳の最高理想、「道徳の偉大は克ち得た苦しみの偉大による。妻も貞淑の徳

を全ふするには、私が仕向ける總の苦痛に打ち勝たねばならぬ」と云ふものがあつたからに

私は僅に良心を慰めて居た。此理想を種に芽ぐんだ思想は、長年私が妻に對するプラトニ

ツクな愛情を保持して呉れた。此思想は、私の良い半面であつた。譬ひ意志が弱くて、時々曲げられるとは云へ、私の生涯には茲に靈の安息所があつて、私は正しく強いと確信した。如何に荒廢することも。墮落することも、是れあらば靈の光りは輝いて居る。少なくとも私丈は、此信條を智能ある者が抱く思想——「呀！絶えず不身持をする夫に貞操をつくす妻——と考へて居た。

「爾の求むるものは何？曰く人生の快樂。さらば快樂に行けよ。飽く迄も行けよ。妻は教會堂の聖像の如くに、黙して汝に侍る。妻は爾の爲めに、あらゆる慰籍を惜まざるのみ。油を注がざる洋燈は直に消ゆべし。爾に快樂を欲する心起らば、時を擇ばず、處を擇ばず行け！行きて歸るの時、妻は正座して汝を待つ。爾を待ちて妻は夜を徹すとも、妻は貞淑の女なれば一語も不満を云はず。猶ほ爾は妻の膝に汝の頭を置いて息ふの時、妻は柔かき掌もて爾の髪を撫で、あらゆる爾の疲れ苦しみを魅魔し去るべし。」

是は總て才能ある者の抱く考ではあるまいか？

私も常に此様な考へを抱いて居た。

私の最も深い失望も此自信ある爲めに和げられた。此遁れ場があつたが爲めに、私が最も暗黒に沈む時でも尙ほ此の爲めに數條の光が注いで來たのであつた。——妻の愛情、夫の才能——此れがいつでも私の道徳の最高理想に一致を與へて居た。

此れ程な信條が單に疑惑だけで滅び得やうか？

私はジウリアノが出て行つた後、此の心内の思索が總て働いた。ジウリアノの動作の些細な事まで一々心を留まつた。

一寸した外界の刺撃で、私の神経が高ぶつて、此様な考へが起きたのだと、幾遍も心を持ち直して見たが、猶ほ私は苦痛から遁れ得なかつた。心に消えない印象が、私を追つてやまなかつたので、「ジウリアノは別な女の様になつた。」と思ひ、而して彼は何か新たなものを得たのではないかと思つた。小説家アルポリオが自著を捧げた事が妻の心に何物かを加へはせなかつたか？果して左様であらうか。妻の貞節を飽く迄疑ひ得ないのはジウリアノと云ふ純潔な名に崇高な響きがあるからではあるまいか。……疑ひの嵐が吹き荒んで石垣は崩れたが、崩れて散らかつた中に、猶白い象牙の信の靈龜を鮮やかに拜み得られる

のが私の其折の心であつた。

毒々しい疑惑の蛇に噛まれた傷の痛さを強めて堪えて、目に觸れぬ様にと努めた。が強ひて強ひて静める心の浪が何時荒れ様も判らぬ。シウリアノの肌は白い。白いが故に信ずるか、親しきを希ひて。と天才の作者が書いたは果して何の意ぞ……」

といらだつ様な想がして、此の時のあかぬ煩悶に愈々亂される。到々肩を聳やかして身を引き入れ、窓の戸を閉めた。而して二度ばかり室内を徊つた。書架から本を出して擴げて見たが一行も讀まずに閉ぢて終つた。頭の攪亂は少しも鎮まらぬ。「仕方などなれ、」と云つて、眼の前の見えない敵でも防ぐ様な手つきをして「シウリアノが全く私より離れて、最早取り戻しが出来ぬか。さうならうと云ふ危険のうちにあるかの二つに一つだ。何れにしても私は今は無能だ。シウリアノが堅固な貞操を守つて、純潔を衛りさへすればあまり變りはないのだ。どうせ必然なものなら止めるのも愚だ。成るがまゝに任せて置かう。彼のシウリアノの室の菊は善い花だ。彼の様な白い大輪を買つてテレサに贈らう。今日の二時に逢ふ約束だ。未三時間はある。先頃逢つた時にテレサはもう暖爐を焚くと云つて

居た。未暖いのに暖爐の側で私と此一週間を楽しく暮さうと云ふのであらう、が未だ此方には此方で考へがある。一つエガノでも怒らしてやらうか。』

私の悶へは花が咲いて妙な方に逃れて終つた。小説「秘密」の中の燃える様な頁が心の中に浮んで来て、其が方角の異つた嫉妬心を起して来て、エガノやアルポリオやに向ける恨みにこんがらがつて終つた。

が此心が漸々鎮まりかけるとシウリアノに對してなんだか臆な、輕蔑と怨恨とが半々になつた様な氣がした。此の時から後、私は殆んど家には居らず、慳貪になつて、懶惰になつて、絶えず澁面をして居た。同時にテレサに對する情慾は愈々荒んで来て、私の全精力は、其が爲めに費やされて、寸時も安まる時はなかつた。云はれ男の狂つた穢い色魔で、健康も愈々衰へて来た。今も今、其冬の頭を思ひ出すと、私の生涯に眞暗な凄切い切れ目がある様な氣がして、ぞつとする。

其冬の私では一度もアルポリオと會はなかつたが、二三度公會の席で顔を見た。始めは或る晩のこと、擊劍會で其處の先生から彼れに紹介されて、二言三言葉を交した。瓦

新燈の輝き、天井の反響。試合刀の閃き、鏘々と鳴る音、劍客の威嚴のある構へや、無作法な態度や、踏みかへる大きな足音や、呼吸や發汗で室内がいざれたつて居ることや、喉からかすれる叫び、怒號、嘲笑の間に對々に劍を擬して、相應する光景が、今でも眼のあたりを浮ぶ。アルポリオが假面を投げて、私に初對面の會釋をした時は、顔に一杯汗が流れて、湯氣立つて居た。最早大分試合を済まして、疲れきつたと云ふ有様、一目で私はアルポリオは擊劍場裡では、懼るゝに足らぬと思ひ込んで終つた。彼の作品に捧げる様な驚嘆は何處へやら消えて終つて、私は只平凡な一劍客に對する様な態度で應接した。

先生は一寸微笑で私に、

『明日は仕うしませう、』

『十時から始めませう、』

『試合ですか？』

とアルポリオが横から問ふた。

『左様です。』と私が答へた。

アルポリオは暫らく躊躇して居たが、

『私は誰とやることになつて居ますか。聞かれるならば承りたいものです。』

『エガノ氏と、』

と私は云つた。

アルポリオは未だ聞きたさうな顔をして居たが、餘り私が事もなげに云ふものだから、

其切り黙つて終つた。

私は先生に向つて、

『先生、一つ五分間の稽古を願ひませうか、』

と云つて、道具部屋に行つた。道具部屋の入口の所で振り返つて一寸アルポリオを見たとき稽古を始めて居た。一見しても餘り上手で無い事が知れた。

私の稽古が始まると、衆目が一時に私の方に集つた。其が頗る私の精神を煽て、私は興奮した。アルポリオはと見ると、眸を凝して一生懸命に見て居る。

稽古が済んで道具部屋に歸つた時、又アルポリオの顔を見た。天井の低いのに汗の臭や

煙草の煙で朦々として、嘔吐を催させる程氣持が悪い。肩を擦れ擦れに無作法に駄洒落を云ひながら、狭くしい中を大勢が流れ落ちる汗を拭つて居る。汗を拭はずと、煙草を燃らす者もある。桶から注ぐ水の響と一所に洪然笑聲もする。私は其間にアルポリオの瘦形な弱々しい姿を見て何とも云へぬ反撥の感があった。

此れ以前別にアルポリオと私と近づいた事はなかつた。又別に近づかうとも思はなかつた。共にジウリアノの行爲にも是れと云つて疑ふべきものがなかつた。私の世間が段々狭くなつて遂には誰も同情して呉れぬ。同情ならば未しも、是とて瞭然と見えるものさへ無くなつた。どの様な刺戟を受けても焼け土に雨が漏つた様に、直ぐ乾いて終ふ。

事態は段々に悲惨な果を結んだ、二月の末に、テレサと卑猥極まる喧嘩をして、私は并エニスに跡を暗まして終つた。

あんなの捕らへたあんな

ジエニスの一ヶ月と云ふもの、全く無頼窮る有様で、彼の水の都と云はれる霧の巷に私は呆然と力の脱けた體を投げた。周囲のものが總て幽霊の様に、憎として中に荒淫にうらふれ果てた肉塊があると云ふ外に何も判らぬ。激しく物に撲たれた後の様、三時間も四時

間も頭を抱えて考へた。が、頸の邊の動脈が、單調にドクドクと悸つのが判るばかり。時々雨が降る。ジエニスの水面に濛々と霧が罩めて、犯し難い崇嚴な夢心地とする。其ばかりだ。ゴンドラに乗つて、其の水面に出ても、棺架に乗つて擔がれて居る心地とする。舟夫に何處へ艘ぎつけませうと問はれる時、只曖昧に目のあたりを指すばかり、心の裡では偽らぬ絶望の聲が「吁！何處でもい、此世界の外に逃れさせて呉れ。」と云ふ。

石塔の塔を

私は三月の未頃に羅馬に歸つた。長い間の眩暈から甦つた様に、眼に見える物が皆眞新しく輝いた。畏ぢたやうな氣狂ひと理由もない恐怖とが時々愕かす様に急激に私を襲つて来て、自分をつくつく嬰兒より弱い者に思つた。而してはじめて物の道理が判る様な氣持になつた。日が経る中に段々心の平均がとれる。漸くにして平常な心持になり、胸の中になんぞ希望の光がさし、未來が頼母しい物に思へた。

がジウリアノは以前より非常に健康を損して、衰弱の影が暗く纏つて居た。二人の間に言葉を交はすは稀で、互の眸を避け、二人の心の重荷を卸さうとはしなかつた。只二人とも小供に淋しさを慰めるばかり、子供が無邪氣に憂のない聲で戯れるのを見るがせめても

の二人の心やりであつた。

「母様、私も復活祭にはバチオラに行くのよ」

と姉娘のマリアが仇氣無く云ふのを、

「左様、御前も一所に行くのかい、」

とジウリアノの代りに私が受け取つて答へた。するとマリアは妹のナタリアの手を把つて飛びまわつて戯れる。其樂し相な子供の前で、私はジウリアノの顔を見て、

「連れて行かうかねえ、」

怖ちた様に低い聲で云ふ。

妻は只頷いた。

「近頃少しは快い方だね」と私は云ひ續けた。

「私も左様思ひますの、是から田舎に移つて……春の……」

其時妻は、椅子に深く凭つて、兩方の手を安らかに垂れて居た。

其様子が何となく此前の病氣の全快日の朝の輝かしい時を思ひ出させた。

無論私等は田舎の別荘に移る事になつて、種々用意に取りかゝつた。私の心の深い深い處で、希望の光が仄めいた。然し其光は果して何かと濃かに見やうとすると何となく怖ろしい様な心持にならねばならなかつた。

断つてソウキルを棄つて本國に居るに決した鬼人の如き
愛國詩人にして斯うした甘い輕蔑は
あつた、嗚呼！！

是が先づ浮んで来る記憶で、悲劇の幕開をする最初のものであつた。前にも云つた通り四月のことで、バチオラには數日を過すことにした。實母は例の氣の置けない調子でもつて子供等に向ひながら、

「ま、可愛らしいわと。羅馬で疲れて來たのだね。いつまでも田舎でくらしして御出よ。田舎に長く長く居て頑丈になつて其の頬にすっかり色艶が出來ればいゝと思つて居るよ。」と云ふのをジウリアノが受けて、

「いつまでも居りますよ御母さん。」と微笑む。

ジウリアノの微笑はいつも實母の前では眞心から溢れる様だ。眼には絶えず悲しい影が去らずで居るが、微笑には眞實のなづかしまがあらはれて、私は其を見る度毎に心の時めきを覺え、ジウリアノにたいする温かい希望が甦つて來るのであつた。

はじめの二三日と云ふものは母は少しの間も小供をはなさず、什麼にして自分の愛情を彰はさうかとそればかりを氣に揉んで居た。而してジウリアノに對しても溢れるばかりの慈愛を注いで、時には小供にする様にジウリアノの髪を撫でたりする。或る時私は不圖聴耳を立てると、

「やつぱりあれは親切だらうね」

「あのツリオ様のこと。さうですわね……」

「何か氣まずいことはありませんだらうねえ？」

「え、別に何か御話でもありませんでしたの」

と云ふ様な話し聲が聞える。實母とジウリアノとが窓を開けて、外に繁つた榆の樹の枝が風に揺れるのを見ながら、話して居るのであつた。私はそつと扉を開けて這つた、窓掛が二人の脊に蔽つて居たので、氣付かぬらしかつた。

「あらツリオ」

とやうやく實母が氣付いて云ふとギウリアノも見かへつて、一寸狼へた風がある。

「今御前の噂をしてた處だよ」

と母が云ふ。

「私のこと。相變らず悪口ですか」

と快活らしく答へると、シウリアノが、

「いゝえ。いゝことばかりですよ」と即座に答へて懺める様に私を見る。

四月の太陽はシウリアノと窓の側に照り輝いて、實母の白うなつた髪も光澤を帯び、シウリアノの額を翳す柔かな捲き髪の間からは、黄金色な反射が見える。純白な窓掛も吹く風にひらひらと揺れ、高臺に繁り重つて居る掬は今が若芽の萌え時で、風に大きく小さく私語いて居る。土の上には影が動いて居る。家の壁さへ幽しい匂をはなつて居るかと思はれた。

「紫丁香花はいゝ馨ね——」

とシウリアノは半ば臉を閉ぢ、片手を額に翳して云つた。私は丁度實母とシウリアノとの間を少し離れて、後ろに立つて居たのだが、そつと二人の間に身を挟んで、二人の手を

握つて見たい様な気がし出した。さうすれば今私の心のうちに増して來かかつた優しい愛の潮ざいが、一寸掌を觸れただけで満ち満ちてくるに違ひない。シウリアノは屹度私の心を見ぬくであらう、と確信しながらも何となくオズオズして手が出ぬ、小供の様に無性に美しい。

「御覽シウリアノ、」

と實母は向うに見える山腹を指さして

「お前の好きなギライラが見えるでせう。」

「はいよく見えますわ」

シウリアノは手を翳して日光を遮りながら指さされた方向を適に凝視めて居る。私は其下唇が少し震へて居るのを見た。

「シウリアノ、御前にはあの檜が見えるかい？」

と私は想ひ出させるやうに云つて見た。私の心のうちには、早や、あの殿に轟々とした、ずじで居る、檜の老樹の幾つかの葉影には、薔薇の花壇が展がつて居り、檜の梢には燕が

群れて歌を揃へて居るのが、明瞭と想像された。

「はい。あの見えませすわ」

井ラリラは丁度向ふの連山の中腹の、稍平地になつて居るところに白う輝いて見える。連山は崇高い心に端然とおちついて、その一帯には緑の雲が凝り固まつて棚引いて居るやう、繁つた密林が連つて居て、それを所々白や紅の花の咲く樹が綴つて居る。雲翳のない空は澄んで光つて折々は牛乳でも漂はす様に明るい。

「復活祭が済んだら井ラリラに行こうね。既う花ばかりだらうよ」

と私は、一度慘酷にも破つた妻の美しい夢を再び元の美しさに築き直す心持で云つて見た。

これを機に私はジウリアノと實母の間に身を運ばせて、兩方の腕で二人の肩を抱いて、そして窓に凭りかかつた。二人の髪はハラハラと私の頬を撫でた。春の慈愛に溢れた空氣崇高い景色が森羅万象に彰れて、何となく造化の有難さを感じる。空は愈々清く澄んで行くばかり。私は自分の胸の中に新たに生命の芽が力づよく伸びて来るのを覺えた。不思議

な位感謝の念に満たされて、「あゝこれは本當か知らん。あのように荒んで罪に汚れたこの身が、此の様な人生の恩澤に浴する。生命の眞清水がまだ盡きないのであらうか——あゝ希望——希望が輝いて居るのだ。幸福。祝福。祝福。私は恵まれて居るのだ。」と何となく私の五體が羅の様に軽くなつて、擴がつて、今までの窮屈な網が微妙な鼓動につれて片端から消えて無くなつて行く。身はさながら無限の宇宙に溢れ出て行く様な氣がした。この時私の頬に實母とジウリアノとの髪ほつれが訪れて来る。あゝ此の胸の中の喜悅は什うしたら言葉に彰はすことが出来やうぞ。

其のまゝで二三分間三人は一言をも話をせず居た。音と云ふのは只楡の梢が風に葉摺れるばかり。その樹の黄色な花と、窓の下に植えてある堇の紫の花とが、揃れて私の眼を酔はす。呼吸毎に強い響が迫つて来る。……不圖ジウリアノは私の腕をほどいたので見ると顔の色が蒼い。眼をしばたいて、船暈を堪えるやうに口をしまつて、

「花の馨が大さうきつう御座いますね」

と云つて窓から頭を引き入れ

「貴方はどう。妾頭痛がして来ました」

と云ひおはらぬうちにはや扉をあけて室を遁れて實母と一所に行く。私は二人の影を見送くつて、半ば夢でもあるかの様に、新たにおこつた身内の感情に魔せられたやう、ふらふらとしたのであつた。

三

日増に未來のことを確かに思ふ様になつた。過去の事が漸々記憶から薄れて行く。痺れた疲れた私の靈魂が、昏々と冥して行く。最早や苦しいものも苦とは思はないほどに衰へた。こうなつた揚句は只總てのことが晴々と忘られてしまふばかり。そして何となく伸々とした氣持になると同時に身體がいつしか擴がつて、溶けて流れて、無垢に歸るやうな事がある。斯様な時にはいつでも新しい生命が私のなかに流れ込んで。新しい氣力が凛と加はつて居た。

自づと起つて来る刹那々の感情が、確と現實の生活に合して来る様な氣がして、私の外と内との心が一致してしまつた。

大病が全快すると却つて身體の健康を増すと同じく、精神も一たび危機を通り越すと不思議に爽快を覺える。野の貧しい花草の春を得て頬笑む姿、半ば朽ちた親株から新しく萌え出した勢のいい葉、その上にはほゝえむ花、いづれも私の思を停めぬものは無い。私の心

は幼兒よりも無邪氣となり、始めて自然に驚かされたやうに呆然として空しく清く素心の純に環つてしまつた。

朝早く森羅万象が鮮かに微笑むで、自由で、雅で、冷々として、すがすがしい心になる度に、幾遍となく兄と一緒に散歩に出た。兄のフェデリコと一所に居ることは、田舎の健全な空気が同じく私を純潔にし、私に新しい力を與へた。兄は二十七で田舎にばかり居て禁酒と労働との生涯を送つたものだから、地を耕す人の誠實をすべて具へて居る。所謂、生活の信條を全く體得したものの杜翁が見たら其の額に接吻しながら悦んで「我が子よ」と懐しく叫んだかも知れぬ。

兄と農場を歩いて居る時は、繁々と話をするのではなかつたが、只土地の肥えたのを自慢したり、新農法を説明したり、改良した處を指さしするのであつた。農場の建物は、廣々として居て、空気の流通がよく、掃除も行き届いて居る。廐のなかには光澤のよい元氣な家畜が澤山養つてはあるし、酪農場は一絲亂れず整頓して居る。又折々兄は植樹を持つた。細長い柔かい枝を撓めて、枝の端の青々と萌える若葉を觸つて見る兄の手は、此の世

ならぬ清らかさに優しい。又或時は、二人して果樹園を逍遙つた。桃、梨、林檎、梅、杏の樹など繁り重なつて、花をつけて居る。その花葩の紅や白の日光に透いて、霧が光るやうに輝いて居る——何とも云へぬ臙げな、慈愛のある様なこの花の影——空中に満ち満ちた小さな花冠の隙間隙間を漏れて、蒼空は人を魅魔する様に覗いて居る。

花の美しいのに見惚れて讚めると、兄は

「まあ、待つて御出でなさい。これから美しい果物が實るから。」

と云つて、さも頼母しい實が枝々に懸つてでも居る様に見あげた。

私は心のうちに云つた。あゝ。さうだ。花が凋んで、卷いた柔葉が伸びて、果實がだんだん成熟して、そして枝から豊かに墜ちる。「兄の唇から漏れた言葉が今更此様に身に浸みた。花が咲いてから果物になる迄の間の有様をはじめて悟つた様に、私は新しい教訓を得て、憧憬れて、幸福が手にはいつた氣持がした。「私が別に云はないのに、兄の方から母と私とが秋の果物が實る頃迄、この田舎別荘に居るものと獨りで決めて居る。私の新生活涯は愈々これから創まるのだ。既に私の心のうちに漲つて居るこの感じは、慥に私を欺い

ては居らぬ。不思議な程、萬事が、自づと好調に整つて行く。何と云ふ感謝の情に満ち溢れたことであらう。」と斯様なことが絶えず頭に浮んで居た。例の誇張する私の性癖かも知れぬが、些細のことが大變よい前兆に思はれて、時には小供らしく呆けて居ると思はれる位有難さの念が胸に溢れた。

私の喜悅の泉と云ふのは、私が暗い過去の事實から全く遠ざかつて、今はある明白な所に達し、加之も其れは他人の達し得ないものであると云ふことを、確に知るにあつた。田舎の平和と春の暖みとを充分に身にしてみれば、あの惨烈な苦痛の甚だしかつた過去の暗黒世界を、振りかへつて見た。がまだ何となく現在のことが安全であるかどうかは疑はれる。確めたさの心が起つて、そつと兄と組んで居た腕を解いて、兄の眸のうちに漂ふ愛情を讀むのであつた。

私は兄に充分の信頼をした。單に兄に愛されると云ふばかりでなく、兄に全く支配されるのを欲した。兄とは云ふものゝ嘗つては亡き妹の許婚であつた。弟其の弟の方が秀で、居ると信じた。で私は其忠告を守り指導者として一々其言葉に従つた。兄の側に居りさへ

すれば、危険に這入ることは無い。兄の腕は私を守護する一番強いものだ。實際兄は善良で健康と智能とを有す好模範の人物であつた。「土」を最も愛して、其の爲めに何物をも捧げて居る少壯な兄の姿が、私の眸には實に崇高に映じた。

『田園の基督』と私は或日は、えむで兄を呼んだ。

それは或る極早い朝のことで、なんとなく原始時代の地球の曙を想はせる農場の一隅に多くの人を集めて、何か話して居る兄の姿が臍ろに見えた。而して大勢から離れて一人たつて素朴な言葉と手眞似とで云ふ。人世の荒浪を経た老境の人々等は皆んなそれを感心して聽いて居た。聽いて居る人々はいづれも縷縷の衣に生活の苦闘を思はせて居た。私か近づいて行くのを見ると、兄は話をやめて、私のところに来た。私は自づと唇を動いて「田園の基督」と云つたのであつた。

兄が野菜園を大切にする用意の深いのに又私は驚嘆と敬虔との想をした。萬事に氣の付く神のやうな鋭い注意深い其の眼は、何物をも粗漏にはしなかつた。毎朝の散歩の折にでも、兄は必ず一足々々に注意を罩めて、葉裏にみそむ蝸牛、青蟲、蟻を除かすには居な

つた。或る朝兄と歩きながら私は何思はず手たした洋杖で頻りに艸を薙いだ。若い葉が散つて飛ぶのを見て居ると、兄は、堪へられぬやうな身振をして、そつと柔かに私の手から洋杖を奪つた。其の仕方がいかにも自分の感情の動きやすいのを耻ぢた様に、一寸顔を赤めたのであつた。あゝ男らしい兄の顔に宿つた。あの云ひやうもない優しい心根よ。心根よ。

又或日、私が林檎の樹から、一枝花の咲いて居るのを折らうとすると、フェデリコの顔に驚いた様な影がさしたので

「では折るまいか。」

と云ふと兄は何かまぎらさうな様で大聲で笑つて、

「いえいえ。皆折つても構はん。」

と、はやすでに大きな一枝花は半ば折れて居た。折れ目から木の漿が出て、丁度、負傷者の様に大枝に懸つて居る。懸つて居るは僅に二線三線の纖維の爲であつて、其れに咲いて居る、半白半紅の花は、そよ吹く風に揺れながらも、最早實を結び得ぬ運命となつて居る。

私はせめても自分の惨酷を軽くする説明にもと、

「ジウリアノに」と云つて其の枝を全く折つてしまつたのであつた。

シウリアノに花を持つて歸つたのは、此の林檎の枝ばかりではなかつた。私はいつでも外出して歸る度に妻に花を携へた。或る朝、私は兩の腕にこぼれるほど澤山山櫨の花を抱えて歸つて來ると玄關に母が居た。私は上氣して機むだ呼吸をしながら、

「シウリアノは何處に居ます？」

「二階だよ。」と母は笑ひながら云つた。

大股に階段を昇り、廊下を通り、妻の部屋の前を開けて

「シウリアノ。シウリアノ。——何處に居るの？」

居間には小供が二人居るきりであつた。小供は私の手にした花を見て、嬉しまさげに私を取りまいて、躍つて居る。

「あの御母さんは寢室よ。行きませう。」

小供の云ふまゝに導かれて急いで寢室に行つて見ると、シウリアノがほゝえみながら一

寸狼へて居る。私は妻の足もとに一抱の山櫨の花を投げだして、

「まあ御覽。こんなに澤山もつて來た。」

「お、まあ美しいこと。」

と、露に潤んだ馨の高い山櫨の花に、身をかゝめながら。シウリアノが云ふ。

シウリアノは伽羅木の若葉を思はせると云ふ好の萌黄の寛濶と、流れる様な外衣を着て居た。髪はまだ装はず、たゞ緩く大きく束ねたまゝに、總々と耳を蔽ひ、頸のあたりを全く隠して居た。足もとの山櫨から薫つてくる馨はシウリアノのめぐりに満ちやがて室内に溢れた。

「刺にかゝらぬ様用慎を申し。」

と、私は云ひながら手を出して、

「これを御覽。」

刺に搔かれた傷のまだ生々しう手にのこつて居るのをシウリアノに見せた。こんなにまでして山櫨をとつて來たと云ふ意で。

私は心のうちに、「この手を觸つて呉れないだらうか」と願つた。同時に昔の記憶——矢張山楯の花であつた——其を手折らうとして、刺に搔れるとジウリアノは直に私の手を把つて、傷跡に接吻して、流れて出る血を幾度も其唇に吸ひ取つて呉れた。「あゝ、今もジウリアノがそつと私の手を把つて、やさしい心に私の總ての罪を赦して呉れはすまいか……」

此の日ごろ、~~私~~此の様なことを待ちうけて居た。別に理由はないのだが、只何となくジウリアノが再び私に近いて、あの單純な、いつはらぬ黙つた仕方、昔の愛情にたちかへり、私のすべての罪を赦し、私にすべての愛を捧げるのは極間近に迫つて居ると。

が、ジウリアノは寂しく、えんだばかり、悶えの影が白い顔と窩んだ眼とをかすめて過ぎ通つて行く。

「茲に移つてからすこしは快くなつたかね。」

と私は妻に近づいて問ふた

「はい。快い方で御座いますの。」

と答へて暫く黙つて居たが

「貴方は？」

「私か。私はこの通りさ。元氣なものだらう」

「……………ハイ……………御結構で御座います。」

と云つた。昔の楽しい折にはジウリアノはたいあざけなく口籠つて語つて、其れが最も私を魔魅したのであつたが、此頃は其れがなくなつてしまつた。只いつも何か自然に口のぼつて來る言葉を、無理におさへて他の言葉に更へてまぎらさうとばかり努めて居る女となつてしまつた。以前は心の底からハキハキと云ひ切つて心地よかつた其言葉が、今は女々しく遠廻しに云ふ様になつた。耳を塞がれて音楽を聴く様な感じがする。何故に妻はこれ程迄に私に親切をつくしなから、尙一步を進めて呉れないのであろうか？ 今妻と私とを此様に不思議に隔て、居るものは何であらう？

此の頃の心の状態は何う解釋してよいか譯が判らぬ。私の心の生活の闇黒な時代として、今も尙ほ神秘の霧につつまれたまゝ、残つて居る。此の時代には私が持つて生れた明晰な心

の働きは全く魔痺されて終つた。あの一々細かく分解して、どの様な小さな感情でも、其の原因結果を探らねば止まなかつた考察的なところは、缺けてしまつて、事の前後がハッキリと判らず、何につけても判断が出来なくなつた。

よく昔嘶に聞いたことがあるが、さる王子が戀人を探すために所々を漂浪して種々難儀をした揚句、戀人は眼のあたりに居たと云ふ。其戀人の着て居た面衣が、所謂置れ簞で、王子が燃える希望を胸に抱いて探すのを、眼のあたりは、えんで居たのであつた。

この昔嘶が、さながらに、ジウリアノと私との心の状態を云つて居た。ジウリアノと私との間を、此の不思議の面衣が遮つて居るので、何となく二人を遠ざけて居た。がさすがに、妻の單純な口數きかぬ素振は、おそかれはやかれ私の心に移つて、隔ての面衣もとりぞかれ、二人は幸福になるであらうと思つて居た。

ジウリアノの寢室は私の眼を悦ばせた。淡白な彩を施した繪畫が、壁に掛けてあつて、萎れたまゝの赤い花が針で留めてある。美しい華な寢臺は隅に置かれてあつて、横たはれば身は深く心地良く沈みさうだ。山楯の高い聲が愈々室内に充ちた。

妻は蒼蒼とめて、

『大變高い聲ですれ私頭に障りさうですわ貴方は何とも御座いせんか?』

と云つて窓の戸を押し開けたが、やがて娘のマリアの方に向ひて

『エデス様を呼んで御出で』

やがて家庭教師のエデス夫人が來た。

『エデス様。此花を音樂堂に持つていつて、水に浸けて置いて下さいまし。刺に搔れぬ様に下さいよ』

マリアナとナタリアとは一所に持つて行くと云つて、家庭教師と出て行つた。室にのこるはジウリアノと私と只二人きり。ジウリアノは窓によつて脊に光線をあびた。

『何か用事があるかい。私が茲に居てもかまはないかね』

と問ふと妻は

『どうぞ、茲に居て下さいまし。今朝は何所を御散步? 面白いこと話して下さらないの。』
と口早に云つた。腰あたりまでくる高さの窓の棧に肘を休めて上半身を後に反らせなが

ら窓框のなかに、繪にしたやうな其折のジウリアノの顔よ。後ろに光を負つて眞面に私に向けた顔は、影にくらくなつて認め難い程なのに、その窩んだ雙の眼のぐるりに巻く悒愁の色は淡い黝ろさの眼立つ。さりながら此の弱々しい輪廓に照り輝いて来る朝日の光が、總々とした髪に榮えて、肩のあたりから頭を繞つて明るむ暈の麗々しさ。その全身の重みを托した方の片足は、豊かな衣裾を潜つて、絹絲織の靴足袋もあらはに、金の縁をとつた寢室用のスリッパと共に靜に擧げられた。あゝ全身光線に浸つた此の場の姿勢の誘惑的な力の偉なさよ。そしてその上、窓の框に際られた、青々として蒸されるやうな樹立の庭の眺めが彼の女の後ろに遠く深い背景となつて居る。是は果して實際の私の妻か。思ひなして見まもればたしか人を魔魅する女神の様。

その刹那丁度電光が閃いて來ることく、初恋の姿が浮んで、胸の血が一時に潮騒のやうにどよめく。急に抱かれて見たい心が萌す。

私は妻の顔をつくづくと眺めた。眺めているに従つて私の心は亂れた。妻も私の心を知つて居たであらう。其の胸のうちも私と同様に亂れて居るのが見えて居た。どよめかねる私

の情は「抱けよ。雨の腕を擴げて抱いて見よ」と迫るのであつたが、何となくそれがなし得ず、たい胸にのみ沸々と血が湧いて漲るばかり、胸の震ひのたへがたくはげしく、苦みのいや増してゆく恍惚よ……

折りからに小供等とエデス夫人との聲が隣の部屋のあたりで聞こえた。

私は立つて、窓によつて、ジウリアナと並んだ。そして斯う話そうあ話さうと心のうちに貯へた澤山のことを、親しうより添つて今にも唇から出さうとしたが、又邪魔されてはと思つてひかへた。私は心のうちを充分に打ちあける爲めに、最適な機會の來るのを靜に待つことにした。今話したとて總てをつくす様なことは出来まい。心の奥底を開いて、この三四週間の私の内心の有様を、濃やかに語つて、私の心の神秘的な復活を告げ、優しい想の再發や、美しい夢の再現や、希望の頼母しさや感情の深さを詳しく語ることは出来まい。今はそれ程の餘裕が無からう。其れに此様に喜しい話を今して済すのは何だか惜しい。ジウリアノを心の眞底から悦ばせるのであるから、もつと理想な時機を得たい。今まで度々失望させたのだから、今度と云ふ今度は、確實にジウリアノの心を落ちつかせねば

ならぬ。眞面目な、動かない、私の根本から徹底した誠をしめさねばならぬ。妻はまだ私を疑つて居る。疑ふからに此の様に何となく打ち解けないのだ。過去の惨酷の影がまだ二人の間に漂つて居るのだ。この影を跡なく拂ひさつて、二人の靈を新たに結びつけて、何の様なことが起つても離れない様にする。さうする機會は何所か吾等の蜜の様に甘い想出のある静な隠れた所でなくてはならぬ——あゝ、井ラリラ。井ラリラ。

ジウリアノと私は黙つたまゝ、窓に並んで居た。盡きてしまつたか、馴れてしまつたか、山櫃の響は既う來なくなつて、次の間から小供等の戯れる言葉が手に把るやうだ。

ジウリアノは頸垂れた。此の甘い濃やかな傷めるやうな沈黙の重さが、恐らく妻の頭をも斯うして堪えがたくしたのであらう。見れば輕やかな心持よさうな風が、妻の顚のあたりに寛く解けて垂れさがつた捲毛を吹いて玩弄の様にもてあそんで居る。あの糊を固めた様な眞白い顚の上に、金線を淡く鏤ばめた漆のやうに黒い捲毛の絶え間なき戦ぎのやるせなさよ。やる瀬なごよ。眼を据えて凝乎見ると、又も氣づくあの頸の上の小さい可愛い黒子。あゝ、いくたびか好奇の心をひいたあの小さい可愛い黒子。

堪えられずなつて、私は臆する心と勵む心との間にそつと手をのばして、其髪の亂れを撫で上げた。私の震へる掌は靜かにジウリアノの髪の上を滑り、耳に觸れ、頸に觸れた。輕やかに輕やかに偷むやうな抱擁となつて私の兩腕は妻の身體を繞つてしまつた。

『あらまあ』

とジウリアノが驚いた様に立ちあがつた突嗟、私に向けた優暇みの亂れた輝。心の騒ぎを見せた常ならその震へは私のよりはひどかつた。

妻は窓を離れた。そして私が隨いて行くのを氣づかうやうに五歩六歩通れやうとする。

『通げるのジウリアノ。』

と私は云つて見たが、心のうちには「ああ。さうされるのも無理ない。許せジウリアノ。まだ私にはさうする値がない」と叫んだのであつた。

この時教會堂の二つの鐘が鳴り始めた。小供等は悦び叫んで扉を開けて這つて來て、交るがはるジウリアノの腕に縋つて、頸に抱へついて頬のあたりへ接吻を重ねる。やがてジウリアノからはなれて、私の方にくる。私も小供を抱き上げて接吻をした。

賑かに鳴り響いた鐘………賑やかに鳴り響いた鐘——あの青銅の發する強い音に、パチオラ一帯の地には崇嚴な氣が浸み透るやうだ。あゝ今日は聖土曜日、復活祭の時である。

五

その土曜日の午後は、妙に沈鬱の影が、私を壓したのであつた。郵便配達が新聞を置いていつた處なので、私は兄と一所に、玉突室でそれを讀んで居た。

ふとアルポリオと云ふ名が、私の眼にうつつた。突然に私の全身に、或る嫌な感じが漲りわたつた。丁度底に塵の澱んだ洋杯の水が澄んでは居るもの、一寸觸れば忽ち溷濁の雲を沸かすやうなものであつた。

其の日は霧が深く罩んで、青白い水の様な太陽の疲れた光線が流れて居た。高臺の方に向いた窓の戸は開いたまゝ、戸の外側の芝地の上では實母とジウリアノとが腕を交換して逍遙つて居る。ジウリアノの手は一冊の本を携へて居た。

夢幻影の不確かな世界にでも居る様に、憎うとして、私の頭にはとめごのないことが浮んで来る。あの十一月の朝、ジウリアノが鏡を眺めて居る姿、大輪の菊の花、あの快さう

な謳を聞いた時の感じ、『秘密』の飛頁に書いてあつた文字、妻の着物の色、窓に凭つての想、汗が流れて湯氣立つて居たアルポリオの顔、撃剣場の道具部屋、と這麼ことが数かきりもなく浮んで来る。不圖眼を開いてはじめて断崖の際に立つて居る危険に気が付いたと云ふ風で、私は急に怖ろしさに身震した。あゝ私は遂に救はれないのであらうか？」

悩み疲れた餘り、寧ろたゞ獨りとなつて、此の苦痛に面ど向つて苦み悶えて見たい様な欲念がおこつた。兄に一寸した口實を繕つて玉突き室を出て私の居間に歸つた。

私の悶亂には忿怒と短氣とが混雜て居る。さながら幻覺的に既う健康を恢復したと自ら思ひ慰めて居る病人が、まだ身體の何處かに病氣の根は残つては居まいかと、性念かけて疼みを感じやうとする心持である。確かな徴候があるかどうかあると知るは凶悪ながら、知らでは濟まされぬ此のやる瀬もない痛ましき、悶はしさ、凶悪な眞理をまざまざと眼の前に發見せねばならぬ。あゝ私はジウリアノに見捨てられて居るのか。眞當か。見捨てられたは何の故！

一度は不思議な「忘却」の淵に、萬事を沈めてしまつて、あのジウリアノを疑ふ炎の様な

心さへ、殆んど跡形なく消してしまつて居た。そして私の心は、只希望すること、信頼すること、美しい清い理想に耽ることばかりを、努めて居た。ジウリアノの髪を撫でて居る實母の聖者の様な顔を見ては、ジウリアノの頭に暈のかゝるを覺へた。こんな美しい想像に度々訪れられて、母とジウリアノを見る時は、いつでも純潔な清らかな天女の姿としか思はれなかつた。

それを、今、些細な——新聞紙に一寸あの名が揚げてあつただけで、暗い想をむかむかと避へらした。私を顛覆してしまつた。慘じくなつた。私の心は悚立つた。何んでも断崖の際を曳きずられて行つて此の怖ろしい谷底を見よと強られるが、強ゐても幸福を憚れる夢想が、どうしても私の眸を大膽にその凶悪な奥底に注がしめた。ジウリアノは既う純潔ではない——アルポリオか誰かがある！若し其れが確かに判明しても、爾は妻をゆるすか？許すとは誰が、爾には許す資格は無い。ジウリアノは幾度も黙して堪えたのではないか、今は爾が忍ぶときだ。今求めて居る幸福は、爾のみの爲か。ジウリアノと相共にか。若し妻が節操を破つて居るのに、爾が其れを許すとすれば、既に一枚のエールを以て偽つ

て居るのではないか？ゆるすべきならば何故ゆるさぬ。全然過去を脱した新しき人たらんと欲するならば、何故にジウリアノを新に生れた別個の女と見放さぬ？とは云へ私の理想——理想を如何にするか？私の幸福はジウリアノが絶體的に純潔であつて、何所までも崇高であるといふより外は無。更めて始から生れ變つてくる。ジウリアノも此純潔崇高を自覺してこそ始めて幸福となり得る。が果して私等に斯麼幸福が得られるか。今迄私が罪悪をおかして居らなかつたならば、ジウリアノにあれ程な純潔な崇高な沈黙があるとは知ることが出来ないではないか。この裡にも爾の自我主義が閃いて居る。抑も爾は高い幸福を望む資格があるか。爾が長い間の荒淫も爾を悲ませると云ふよりは、爾に新たな酬を望まして居るのではないか——

こんな自問自答の連続から遁れやうと、私は身體を震つた。「何でもない過ぎ去つた疑ではないか、其れが一寸とした新聞記事で黽つたばかりだ。影に惱まされて居るのだ。復活祭が済んで二三日すると、ギラリラに行く。そこに行きさへすれば疑惑の手とつかぬ所に、私等に愛の信が置かれるのだ。——が——が——あのジウリアノの沈鬱な深い眼——

あれには疑の光が宿つて居るではないか。遠い所ばかり見る瞳、いつも暗い影の去らぬ額、何處か疲勞の見えるあの態度、——あゝいつでも私が近づいて行くと一寸と神經的に狙へるのではないか？」この様な曖昧なとりとめもないことは、平氣で居る時は直に消えてしまふものだが、その時は私はどうしても通れることが出来なかつた。蹣跚と窓際に行つて外面を眺めた。せめても外野の景色に眸をうつせば、何か心の慰むことはないか、照り光る輝はないか、かぐはしい柔かい匂はないか、と願ひながらあたりを見まはした。空は羊の毛の様な雲が重り重つて、風の行衛に流れて居る。或ものは面衣の様に濛つて、次第次第に遠ざかり、地平線の梢を搔いて、断れて、亂れて馳で消えてしまふ。あの消えて行くあたりを断續する山の峯々、朦朧な影に消えては又彰れて、幻想の夢の國を見るごとくに淡い、谷には鉛色の影が充ち渡つて居り、岸は見えないがアソロ河の水の色ばかり艶のぬけた白い溜を濺へて惱む想に沈むでも居るやうだ。曲りくねつて居るあの川條のうち日頃は沈鬱なあの淵の廣い處だけが、今はぼんやり白く輝いて、變幻な空の雲と觸れたり離れたりするやうだ。そして其處には此のととりとめない景色を支配する雲でも棲むで居る象徴

的な處であるかのやうに思はれる。

だんだんに私の内心の苦痛の鋭さが鈍つて行つた。平靜になつた様な氣持もする。「何故熱烈にも其麼爾には不相應な幸福の跡を追ふのか。何故崩れやすい夢のやうな幻想の礎の上に、爾の長い未來を建設せうとするか。何故又其の様な盲目の信仰を續けて、有りもしない特權を身につけやうとするか。誰でも生涯の長い道程のうち一度は、必ず決斷せねばならぬ危機に出くはすものだ。その一番著しいのは、此の生命を如何にすべきと云ふ問題ではないか。そして爾は最早此の問題は通り越して來たのでは無いか。思ひ出せよ。あの眞白い眞心の手が、愛、誠、平和、夢、恍惚、總べて麗しきもの悦れしきものの極をつくして、爾の前にさし出された時、爾は抗する能はぬ強い力に魅せられて、是こそ人生無上のもの、我が身一生に一度うける、光榮の纏頭だと思つたのではないか。」

惨たる悲痛の念が充ちて、涙が潤み出て來る。兩方の肘を窓の下框に凭せて、頸垂れて顔を兩掌に埋めた。が馳てそつと顔をあげて暫くの間、鉛色の影さす谷に水の流のきらめくのを見いつた。見あげれば大空に隙き間ない雲の動き、動く度に雲の姿は私の心を瞰み

つける様で、今にも此の頭の上に大な詰難の手が落ちかゝりさうな威嚇が迫る。長い未來の後と思へばすぐ又此の瞬間に、此の瞬間と思へば、明日か明後日かいない遠い未來に、時も定めぬ、又名も定まらぬ、偉大な闇々黒な破滅が、あゝ危い、觸れなば切れさうな小さな糸に絡まれてわが身の上に重く吊られてさがつて居る。

突然階下からピアノの音が響いた。此れを聞いた一刹那の頭上の重みは晴れて無くなつてガラリと變るかと思ふと夢や憧憬や希望や悔恨や欲求や、沈悶や恐怖やが今度は全然別な調子で混雜しだして來た。眼にも見えず呼吸もつまるほどに速にぐるぐるといり混ざ

る。その音楽は直ぐと思ひ出す。「言葉なきロマンス」と云ふ曲だ。ジウリアノの得意の調でエデス夫人とよく一所に奏でた。それは朦朧に見えて加之も深刻なメロディの一つ、「魂」あらはれて「生」を訪ふと云ふ。調は激しく變化する。深い意味が包まれて底に強く潜つて人を壓するやうなその調べ。聽いて居ると「靈魂」がすさまじく「人生」に「何故に我が期待を破つたか。」と云ふ詰問を幾度も調を變へては繰り返すのであつた。

足の本能が自づと動くまゝに任せて階段を降りて、長い廊下を通つてそのピアノの音の響く部屋まで行つた。見れば扉が半ば開いて居る。そつと身を滑らして這つて帳の隙から覗いて見た。ジウリアノではないかとはじめは光線の具合で眼が眩むで居たのでよく室内が見えなかつた。が山樫子の聲が鼻をついた。やうやう眼が順れて、よく見ると簾を透してぼんやり青くなつた午後の光線のもとに、ピアノに獨りエデス夫人が居るばかり私が來たのに氣づかず夢中になつて譜をおして居る。磨かれた樂器の金具がうす暗い中に光り、山樫子の花は灰白く幽霊の様に浮いて居る、此の平和な隠れ家に、その美しい花は、今朝私が持つて歸つた時のジウリアノの微笑を思ひ出させた。嗚呼、あの微笑と、私の心の恐怖と、何と云ふ此のロマンスの對比の凄じさ。それに樂音の響がいよいよ私の心を亂すばかりである。

ジウリアノは何所に居るのだらうか？二階には居なかつた様だ。戶外に居るかしらむ。そつと私は扉を滑つて出て、只獨り長い廊下を通つた。どうしてもジウリアノに會ひたい一度發した此の欲望は止めても止まられぬ。何んだか一目見れば胸の中が鎮まるやうな氣

持がして、平和と自信とが十分に購はれるやうな氣持がした。戶外に出て見ると高臺に櫓の繁つて居る影にジウリアノが兄のフェデリコと話して居た。

兩人とも私の近づくのを見て微笑むだ。フェデリコは私に、

「丁度お前の噂をして居た處だ。ジウリアノの言葉ではお前は既うぢきにバチオラには御飽きたと。あの種々考へて置いたことどうせうね」

「そりや虚。ジウリアノに判るものか。私は全く反對だ。私は羅馬に既う飽き飽きしてたまらないんですよ。」

と私は平常の平氣で云つた。

ジウリアノを凝視めた。不思議に私の心が變つて來て、此の時まで私の心のうちに積つた暗い悲しい想が底に沈んで行つて、だんだん臙ろになつて遂に消えてしまつて、健全な感情が湧いて出た。ジウリアノは撫肩を一しほ下げて身勝手に座つて居た。其の姿の何と云ふ愛くるしさ膝の上に先日私が讀めと云つて與へた杜翁の「戦争と平和」とが置いてあつた。妻の姿、妻の眼ざし、そのあたりが皆美と善と愛との呼吸に満ちて居る。あゝ何と

云ふ崇高な健全な此の思ひ、おそらく此の同じ楡の樹の影に、凋んだ花の散り敷く中を、亡くなつた妹のコスタンザが、フェデリコと共に茲に立つたのを見たとするば、必ず今私の胸にある様な感を兄と妹とに對しても抱いたのであらう。

楡の樹は風がそよぐたびに花の雨を降らせた。午後の光線の漲る間を蝶が翅をゆるがす様に、花がしず心なく散つて来る。其れがジウリアノの膝に、肩に降りかゝる、時にはその美しい髪の上にも落ちる。其れを妻は優しい手を伸ばしてとりのけるのであつた。いつまでもやまぬ様に花はしとしと降りつゞくばかり。

フェデリコは云ふ。

「お前がバチオラに居てさへ呉れると澤山面白くことがあるよ。ちつとは御百姓も教へて上げやう。葡萄園がまづ手始めね。葡萄を採るのが先づお百姓の手習だ。お前はそんな白い手なんかして山櫃子に撮られる様では駄目かも知れんが。」

兄は性來の明晰な温い音聲で話す。兄の話は何となく聴く人の心に安心と信用とを思はせる。尙ほしきりと舊約聖書にある葡萄園の事なども話した。兄の思想も感情も、兄を尊

敬して聴く多くの人からの賞讃で和げられて、愉快に彩られてゐる。何事にも單純で、心が置けず、いつも偽らぬことを話して居る。素直な心に加へて生來に親切一方な男であるから、まるで杜翁のチモテアの性格其まゝだ。其頃杜翁の「戦争と平和」は北歐にやうやう出版されたばかりだから、兄はまだ読んで居なかつた。

私はジウリアノの膝の上にある「戦争と平和」をとつて、

「その本を読んで御覽なさい。兄さんと同じ性格な人間が出て來ますよ。」

『さうか是非読んで見やう』

私は此度はジウリアノに向つて、

「面白かつたの？」

「面白う御座いましたわ眞當に。同情に富んだ慰安に富んだ小説ですはね。ボルマンスキにもペンウコウにも全く同感してしまいましたの。」

私は妻の傍の庭椅子に腰かけてしまった。何を考へて居るか自分でも判らなかつたが、何となく私の心は空想に耽つて居た。其の時の感じ、其の處の感じ、フェデリコの言葉、

「戦争と平和」シウリアノが云つた小説中の人物など私の頭の中を巡つた。微かに斷續して響いて来るピアノの音が霧で罩むだしめやかさに、一しほ沈んだ色をあびせたのであつた。

側で話して居るのをきかず、私は獨り沈みながら「戦争と平和」を繙いた。たい繙いたばかり眼にふれる頁を處々拾ひ讀みはして居るものの心は深く考へ込むばかりすると澤山の行に線が曳いてあるに眼がついた。見ればトルヨクの驛舎でベソウコウが不思議な老人と話しをして居る條であつた。

「貴方が心に夢みて居ることを、貴方自身にひき較べて御覽なさい。貴方は現在の貴方を満足に思ひますか。これが抑も自らを判する要點ですよ。貴方は若い。財産がある。能力がある。が果してこれらの資質を以つて何をなさつたか、貴方が今迄行つたことを良いと思召すか。」

「では改めなさい。崇高くおなりなさい。さうすれば眞個の叡智が発見されます。今までの生涯は——酒や女に墜落して愉快に耽るばかり、何ひとつつくさなかつたでせう。貴方

の天賦は何かの役に立ちましたか。隣人に盡しましたか。貴方に従つて居る澤山の人々に一つでも立派な思想を教へましたか、そうではないでせう。却つて貴方は彼等の勞働を利用して、罪と懶惰との生活を送つて居るのではありませんか。貴方は結婚した——貴方は一婦人しかもうら若き處女を充分指導するの責任を果しましたか。そうぢやないでしょう。妻を眞理に導くと云ふよりは、耻かき痴情の淵に弄んだのではありませんか……」

茲まで讀むと私の情が急に塞がつて、私は堪えがたくて芝地の草に座りこんだ。今までよりは一層急な打撃を受けて。動悸がはげしくなつた。ことに傍にはシウリアノが居る。私の心の怕れと驚きは百倍にされたのであつた。加之も明瞭と太い線で此多くの行の下には條が曳いてある。シウリアノがつけた線に違ひない。シウリアノは絶えず私のこと、私の罪を心に置いて居るのか。——が——があの終りの言葉「耻しい痴情の淵に」には妻を弄ばなかつた。それだけは私のことではあるまい……

私は胸の悸つのをシウリアノやフェデリコに氣付かれはすまいかとまで氣遣つた。

堪えがたくて、尙一頁を返して見ると、グレゴリで公女リザの死んだ所に又深い條が曳

いてあつた。

呼吸絶えた公女の臉は閉ぢて開かなかつたが、其の美しい小さい顔の色は褪せなかつた。そして「私を斯處にしたのは……」と問ふて居る様に思へた。アンドレアは涙の一滴も減がず。その心には行つた悪業の最早かへらぬを願いて居た。老公も来た。眠つた様な公女の胸に、組んである其の白い手に幾篇も接吻を重ねた。その折にも青い小さな顔は絶えず「妾を斯處にしたのは……」と繰り返すさしか見えなかつた。

「妾を斯處にしたのは……」此の數言に私は、心臓を劍で貫かれる想がした。私は只顔を頁の方に向けて、ジウリアノを見まいとしたが、仕うしてもジウリアノの顔を盗み見たい胸は激しく悸つ。その胸の騒ぎを兄やジウリアノに聞かれはすまいかと、そればかりでも私の氣は亂れて居た。チラツとジウリアノの顔が眼に見えた。その印象が消えぬ。頁の上に描きだされて、公女の死顔につき纏つて居る。ジウリアノが兄ばかり見つめて話して居る物の思はしげな顔……兄の語聲が遠くから傳つて來る様に思はれる。固く締つた唇には極端な疲労と寂寞とを語つて居る。「妾を斯處にしたのは……」と公女とジウリアノとの二

つの影が一所になつて云ふ様……「妾を斯處にしたのは……」

「何をそんなに見て居るの。ツリオさん」

と急にジウリアノは私の方に振り向いて、その本を取つた。閉ぢて膝の上に置いた。神經のみだれた氣配が見えた。が直ぐ何か事にまぎらす様に、

「二人でエデス様のところに行つてピアノでも奏きませう。おききなさい——」
「今のは英雄を葬るの曲」ね。フェデリコさん御好きなのでせう。」

三人は耳傾けた。沈黙のなかをピアノの音が聞えて來る。ジウリアノが云ふ通りの曲である。

「行きませうか。」と妻は立ちながら云ふ。

一番おそく座をはなれたのは私であつた。ジウリアノの後ろになつた。ジウリアノは衣服に落ちかかつた楡の花を拂はなかつた。

地の上には絨氈を敷いた様に花が重なつて居た。ジウリアノは一足やすむで小さな靴の尖で重なつて居る楡の花をあつめて頸垂れた。私は其の顔を見得なかつた、妻はいつまでも

花を重ねて居るのであつたか。深い想に沈んで居たのであつたか。私には判らなかつた。

六

次の日は復活祭の祝ひ日で、ラバデオラには種々の贈物が来た。其のなかでギラリラの別荘番のカリスト老爺が持つて来た紫丁香花は總々とした大きな花朶で、シットリと露をもつて、生々として馨が高かつた。カリス老爺は手づから其花をジウリアノに贈らねばならぬと云ひ張つて聴かなかつた。二三時間でもよいから是非自分が番をして居るギラリラの別荘へ来て此の前の様に樂むで呉れと手を合せて拜む。奥様奥様と頻りにジウリアノを慕つて、いろいろ別荘の有様をのべる。別荘は此の前私等が密月やうな楽しい日を送つた頃と秋毫も變らず、其の儘に保存してあるとか、庭の紫丁香花は既う森の様に繁つて贅澤な花を咲き誇つて居る、今が満開の好時機で、夕暮などには屹度此のラバデオラの地までも風に送られて、高い馨が来て居るに違ひありませんと云ふ。早く行きたい氣を頻りに起らす。檐が燕の古い巢や、新しい巢で一充になつて居る。その巢は奥様の御命令通り除かずに居ますが、あまりあちこちに澤山つけるものですから、折々は竹掃木とシ

ヨベルとで、窓や露臺に上がつて取り掃ふのだが、毎朝燕の鳴聲で大變賑やかだと此の忠義者の老爺、誠を置めてのべたてる。一刻も早くシウリアノをせきたて、ばかり居る。私はシウリアノを顧みて、

「では火曜日に行かうかね、」

「は先刻カリスト老爺が捧げた紫丁香花の大きい花束を手にしたまゝ考へ込む、考へるまゝに妻の美しい顔は紫丁香花の花朶の總々としたなかに埋れて沈む、

「はい。火曜日」

と云ふその言葉は、花が物言ふかと疑はれた。聲は聲とともに私の五體に甘く甘く浸み込んでくる。私の心に襲つて来る此の突然の幸福の波よ。恍惚の波よ。何に動かされて行く？ 私の魂の今運はるるは愛の輪か、戀の轍か、身も心も打ちわすれて、私の唇からハキハキと飛んで出て行く言葉は、

「では火曜日のお午前にまつてあいだ。朝の御馳走は私等が持つて行くから用意するに及ばないよ。判つたかえ。家もちやんと戸を立てた儘で御置き。私等は自分の手で扉を開け

たいのだからね。窓もさうだよ。」あゝ、あの、あの、窓を一つづゝあけて行くうれしさ何とも名づけ難い理由もない喜しさが溢れて来て、私は小供らしい無邪氣なことがして見たくてならなかつた。カリスト老爺を兩腕で抱いてやりたかつた。老爺の白い髯を撫でて、あの樂しかつたギラリラの昔、耶穌復活祭の温かい日光を浴びた頃を思ふさま語りたかつた。が老爺は矢張り正直な無邪氣な顔をして居る。忠順な眸を私に向けて居る。それがどうしても悪魔の誘から導いてくれる守護神の様に思はれた。

此の頃は私の心は再び喜悦に充ち充ちて、何となく私は生々として私にあつまる眸は誰のでも輝いて見えた。すべての事物、私を樂しませぬものはなかつた。ラバジオラはその朝巡禮の集り場の様で、祝つてくるものは小作人ばかりではなく娘達なども皆喜んで祝福を云ひにくる。私は此の聖い手に數へきれない程の接吻を受けたのであつた。教會堂での儀式にも群集が溢れて居たため這入ることが出来ず、多くの人々は蒼い大空の下で祈禱をしたのであつた。銀鈴が人の心をとろかす如く鳴り響いて、あたりの靜かな空気に行きわたつた。塔の日時計臺には「時恩也」と刻り付けてある。ああ朝の輝きはすべてのもの

が恩愛に見える。懐かしい神聖なこの三字は殊の外私の胸にひいた。
 今はどうして私の心に疑惑の雲が残ろう。不純な想像も、汚い記憶も晴れた様に拭ひ去られた。實母の唇は微笑むジウリアノの額に押しあてられて居る。又兄のその尊い純朴な掌は愛らしき妹よとばかり私の妻の白い濃かな手を握りしめて居る。之を眼のあたりして仕うして私だけが躊躇して居られやうぞ。あゝ愛すべき妻ジウリアノ！

七

次の日も其の次の日も井ラリラに行くことより外は考へなかつた。只私の心はこればかり。こればかり。今迄女と一所に出掛けたことは度々だが、此の時ほど私の心が躍つて待たれたことはなかつた。

此の前の土曜日の苦い心の煩悶は、既う悪夢の様に反感を起す。其れに情火がだんだん強くなつて、考へる事が鈍くなつてくる。ジウリアノの心を得ねばならんと云ふ望が、その肉の全部をも得ねばならぬと欲する情と一所になつて、私の胸はたゞ躍るばかりである。井ラリラと云ふ地名がすでに私の情熱をそゝる。——山村水廊の柔らかな景色が情火に燃えたつと思はれたのであつた。其れ迄は私の想像は精心的な方ばかり馳せて居り、其の上いろいろに疑惑が疑惑を産むて行くのをちつと壓さへて静寂に嚴肅に沈思してばかり居たから、井ラリラの静かな景色思へば其處には必ず冷嚴蕭散の氣があつて、寧ろ精舎に行くやうな心持であつたのが今は突然に情の炎が燃えあがつた。ジウリアノの心に赦罪をも

とめるのではなくて、ただひたすらにジウリアノとの戀愛至醇の樂郷に湧躍り行かうとするばかりである。恍惚の外は絶えて無い。額の上におどおどした接吻をするのではなくて燃える唇と唇とを合せるのだ、冷靜な理性の支配ではない、炎の燃えあがつた情熱だ。二人の小供マリアとナタリアとが、頻と私等と一所に行きたがつて居る。ジウリアノも其れを許しさうであつたが、それでは私の心に叶はぬ。私はあらゆる言葉を弄して小供等を欺いて思い止まらせた。

丁度其日の朝は、兄のフェデリコがカザルカルドに所用があるので、その序に私等をギラリラまで馬車に乗せて行き、暮方その歸り路を又ギラリラにたち寄つて呉れると云ふので、ジウリアノも私もその便宜にあづかることにした。

便宜をかりたのはよいが、馬車の二時間三時間を仕うしやう。フェデリコが邪魔になつて何も出来ぬ。凜として居らねばならぬのか。馬車の間ほどの様な話をしやう。ジウリアノには何の様な態度をどうう。私はもう其時からあらゆる情緒をさらけだして見たかつたが、ちつとちつと堪えて愈々ギラリラの美しい景色に包まれてから魔術でもするやうに突

然に優しい言葉優しい心を彰はさうとそれを楽しんで居た。

いや、かへつてフェデリコが居るのが幸かも知れぬ。最初から燃える情熱を其の儘あらはにすることを寧ろ甘んじて碍げられて、兄が御者になつて居る後ろ姿におどおどと氣を配りながら微かな聲で私語きあつて居る、その間にギラリラに着く、下車するともうジウリアノと二人きり肩を摺れ摺れにして樂園の門を心躍つて這入るのだとも考へた。

樂園は愈々眼のあたりひらけた。馬車から下りて扉を開けると鈴が鳴る。その響を聞きながらフェデリコが馬車を驅つてカザルカルドアの道へと廻かに消えて行く、それを見送つた折の私の心の溢れは、筆には描きつくされぬ。カリスト老爺が出ると、たまらなく其手から鍵を奪ひ取つた。

「お前は既ういよ、用があつたらまた呼ぶから。」

と老爺に云ひすて、扉を閉ぢてしまつた。老爺は扉の外で驚いた様な顔をして、私の捨科白を心配して居る。

「愈々来たね」

と私はジウリアノと只二人になると直に云つた。全身を漲る幸福に私の聲は震へた。幸福、幸福——言ひ難い幸福である。不意に現れた幻影が私を囚へて私の心の世界をす

べて改めてしまつて、若い美しささ喜びとを、幾百倍かにして懸すので、私の暗い影は消

えてしまふ。既う美しい花園の垣の外には、私の想は出ぬ。情のままの野生な言葉が何遍となく唇まで突いてくる。思ひ出の情の電光が、理屈の頭を暗ましてしまつた。

仕うしてジウリアノが此の心の時めきを察せず居やう。心と心とは相凭つて居る。私の悦の眸の輝きは、必ずジウリアノの心臓の中心を徹つたに違いない。

二人は互に見かはず。妻の顔の半ば驚いた様な表情——唇の震へは今も明瞭は思い出される。

「庭を一廻りしてから家の戸を開けませうね」

と妻はいつもの雅かな聲で云ふ。何となく躊躇つた云ひ振りで、自づと唇にのぼつて来る言葉を他のに更へる心遣をして居る。

「此の前に来て花の咲き揃つたのを見ましたのは一昔のやうに思へますのね。でもたつた三年しかならない。貴方も覚えていらつしやるでせう。矢つ張り四月で復活祭の折でしたわね。」

妻はたまらなく湧いて来る胸の懐しみを抑へやうとして居る。優しい喜びの浪がさはぐ。

それを静め得ない。庭に這入るからのこの言葉が、過ぎ去つた幸福を充分に思ひ出させる。一足二足を運んでは私を顧る。眸の輝が相會ふ。その擴げた眼には無限の波動が縦横に漂つて、激烈なものを制へて居る。

私の心の奥底から浪だつて來た感情は、既う抑へきれないで、はや私はジウリアノと身體を交はして、その膝を抱き緊め、その手に熱い終りのない接吻を浴せたかつた。「ジウリアノ」と思はず唇から漏れた。

妻は私を顧みて抑へるやうな眼付きで私の心を鎮める氣配をする。何となく足が早まつて、庭の奥に行く。

妻の着物は薄い鼠色で、襷のあたりが薄暗く見える。帽子も鼠色、蝙蝠傘も鼠白に一面白い葉の模様が散らしてある。一脈の寂しさを帯びた温雅なその姿が紫丁香花の贅澤な花の間を迎る。紫な花白い花が總々と露に挽んで裾を纏る。

まだ午には一時間の餘がある。時候の割に温い朝で、青空には綿毛の様な断雲が散つて居る。此の地に名高い榎木の茂みが到るところに瑞々と青葉を蒸して居る。庭の一面蔓つ

た此密林のすがすがしさと懐さ。濃い緑を誇つて居るあそこの間この間に、黄色の花の咲いた薔薇が、紫丁香花の枝に捲き登りて、花冠の様に垂れて居る。その蔭にはフロレンチン種の鳶尾が、鈍い緑色の劍の様な葉を潜つて高尚な蕾を擡げて居る。この三種の花の聲が一所になつて迫つてくる。さながら妙薬にひかされて昔にかへるやうに。私等は樂しかつた頃の幻影に身をわすれた。聞えるものは燕の聲ばかり、昔懐かしい家は丁度眼の前の蒼鬱とした檜の下にあつて、巢をめぐる蜜蜂の様に澤山の燕が群つて居る。

急にジウリアノは足を停めた。私は近く並んで歩いて居るので度々腕が相觸れる。妻は何か見あたらない物でもあるか、身のまはりを急がはしさうな眼付をして見まはす。二三次度其唇が動いて何か云ひさうであつたが、言葉は出なかつた。

「何を考へて居るね？」

と産な戀人になつて優しう問ふて見ると、

「あの、私はいつ迄も茲を離れたくありませんわ。」

「眞實にさうだね——ジウリアノ」

翼のついた矢が飛ぶ様に燕が眼の前を掠める。軋る様な鋭い聲で鳴く。

「ジウリアノ。私はどんなに今日を待ったか。御前察せられるかね……」

と私は遂う遂う抑へきれなくなつて斯う口をきつた。

「一昨日御前どこへ来ることを約束してからは、私は今迄にない心臓の動悸を覺へた。ジウリアノお前はまだ覺へて居るかね、オゲリではじめて二人が接吻を交はした時……誰も知らぬ秘密ね。あの時はお前の戀を求めて、私は丸で氣狂だつたねえ。あの曉の長い間を一人でお前を待つて居る間の私のやるせない思……其思よりもまして今の私の胸は躍つて居る。……私を信じてくれ。それはお前は私の今迄の仕打を見て、私の云ふことは信せられまいが、私は今迄犯した悪いことも、恐ろしいことも、又これから希望むことも一切うちあけるよ。ねジウリアノ。私が今迄の苦みも、お前が堪へた心配に較べて見ればそれは軽いものだど悟つた。お前の今迄の苦しい涙には、とても私の苦みは較べられぬ。私はまだまだ罪の償ひをして居らぬ。が私の眞心を悟つておくれ。ジウリアノ。ジウリアノ。どうしたら私の罪をゆるしてくれるね。眞實私はお前一人を愛して居た。それは大抵

な男が女の心を得る爲に云ふことかも知れぬが、眞實、私の戀はお前一人であつたよ、あの美しかった新婚の三年を思ひ出して呉れ。どうかあの心で私を信じてお呉れよ。たとへ私が墮落の底に沈んだ時でも、私の心はお前を離れて居なかつた。いつもお前の心を失つたのを嘆いて居た。ねえジウリアノよく聞いてお呉れ。お前をたゞの妹の様にした折りだつて、私は悲しい愁に死ぬかと思はれた位だ。私は誓ふ。お前に私の變らぬ深い誰も知らぬ眞心を捧げて居た。私に良い方面があれば、それは必ずお前の故である。みんなお前に屬して居る。お前をはなれて眞の幸福も平和も決して決して無い。あゝ今はもう悪い汚れた羈絆を絶ちきつて、始めて私は眞實なお前の愛に歸る……赦してくれジウリアノ。私の希望を入れておくれねえ。」

ジウリアノは眸を凝乎と落した儘、秋毫もあたりを見ない。顔を眞青にして頸垂れてばかり、遅々として静かにゆるやかに歩いて居る。その口元には折々苦しそうな色が見える。一言も云はぬ。私の心には霞む様に不安な雲が塞した。あたりには春の勝利をほゝえむで
温い光や、花や、燕の聲やがする。

「どうして返事をしないの？」

と私は力なく垂れて居たジウリアノの手を握りしめて言葉をついけた。

「信じてお呉れよ。お前は私の墮落したことを苦にして居るの。あゝあの時は實に私が悪かつた。深い罪を犯した。どうぞゆるしてお呉れ。お前がゆるしてくれぬと私はもう罪の重さに堪えられぬ。私の心はこうして病人の様になつて居るのではないか。ねえ私は罪に呪はれて居るのだ。追はれて居るのだ。其の時から以來、一瞬時も心の安息する時はなかつた。あゝ察してお呉れ。私は絶えず正氣では居られなかつたのだ。お前も時々私を氣狂の様に見て居た。あゝ無理は無い。無理も無い。絶えずお前から恐怖と戦慄との不安な眸を向けられた、私は、眞實に眞實に身の置き處も無い位に苦しかつた。何時も何時も悶々して居た。が今は助かるのだ。救はれるのだ。ジウリアノ。救せ。救せ。一切を救せ。あゝ今。今。暗かつた闇の影に光が輝かに射つて来る。ジウリアノ。ジウリアノ。私は此の心の奥の底から湧き出た、眞實の愛でお前を愛して居る。」

此の終りの言葉を力づくよく緩かに一語一語妻の胸にせまる様に云つた。而してその手を

固く温く握り緊めた。妻はとゞまりて呼吸が絶える程に苦しう蹣跚とした、今にも仆れるばかり。——其の苦しい悶えの所以は後に判つたが、其の折は私の思つたのは「あゝ過去の記憶を思ひ出させて、却つて妻を苦めるまだ癒えない創に觸つたのだ。どうして妻を慰めやう。仕うしたら妻の失望が消えてもどの儘に戻されやう。あゝこんなにまで云ふに、妻は私の誠の心を察して呉れないのか」とばかりであつた。

やがて二人は多くの庭道の集りて居るところに來た。休息臺がある。妻は

「こゝにすこし休息みませう」

と葉末を溢れた露の響の様な弱々しい聲で云つた。

二人は寄り沿つて静に座つた。妻は此の休息臺を記憶して居るか。私は一寸氣付かなかつた。がやがて私の瞳は餘り長い間、想出深いものを見つめた疲勞を恨むやうに潤むで來て茫とした。二人はあたりを視ては又互を見る。同じ想が互の眸に輝いた。此の處の休息臺には私等の楽しい多くの夢の紀念が残つて居る。私のハートは過去を悔い傷むと云ふよりは、これから享樂せねばならぬ新しい生命を望む心に渴いた。楽しい光が掠めて来る。

未来の豊かな幻影が迫つて来る。『今、茲へ妻に此の優しい心根を知らせる良い事がある。眞實の樂園がある。』と斯う思ひあつた時急に私の戀の心が閃めいて、私の呼吸を奪ひ去るばかりだ。

『お前の嘆くのは無理もないが——お前は此世に類ない強い戀をうけて居る。私——この私がこれ程迄に思ひつくして居るではないか。お前が先刻云つた通り二人は茲を離れまい。幸福だ。こゝに居らう。お前は決して犠牲ではない。涙は無駄ではない。お前の生命は失はれては居らぬ。さどつてくれ私の強い愛の心を』

妻は胸に顔を接するばかりに頸垂れて居る。眼を半ば閉ぢ、微動もせず聴いて居る。その睫の影が頬におちて居るのを見た時、私の心は眸を向けられるよりも動いた。

『私……私自身がこの愛の強いのを氣付かなかつた。墮落のはじめ私はお前と永遠に離れたのだと思つた。そして私は他の女の情に酔はうとした。私は強い愛ですべての生命を抱かうとした。お前ではそれが充たさなかつた。私は此強い愛の爲に迷つた。この愛の爲に一寸一寸滅び行く暗い世界におちた。暗いなかに悶搔いた、が今は光が射す美しい眞理が

輝く。私は只一人の女——お前ばかりを——愛する。お前一人が世界の善美だ、私の夢みるうちでお前が一番優しく愛らしい——お前一人たいひとりだ。私が他のものを求めて家を外にして居た時、お前は始終家に居てくれた。ジウリアノ。聴いてくれ。私が遠い他に歡樂に走つたのはお前を得たいからで、其のお前が、私の家のなかに居たのだ。ジウリアノ。話して呉れ。私のこれ丈の告白でお前の話をして呉れ。だがお前。まだ他に悲しいことがあるのかい？』

『いへ何も……』

と妻はやうやう聞き取れる程な低い聲で云つた。

その聲は妻の唇の蒼白くなつて居る間から漏れた、微かな呼吸としか思へぬ位。眼瞼の間には涙が充ち充ちて、頬に傳はり動悸にふるふる胸の上に雫した。燕の聲ばかりが此の樂園を劈くやうだ。

『ジウリアノ。最愛のジウリアノ。』と私は亂れた聲を絞つて、ジウリアノの前に跪いたのであつた。

私は両手で妻を抱き、顔を妻の膝に埋めた。胸がぶるぶると震へて全身に云ふことの出
 来ない情が浪うつ。あらゆる動作をこの一つの抱擁に罩めて、私は力のかぎりジウリアノ
 を抱き絞めた。ジウリアノの涙は私の頬に落ちる。熱い涙……その熱い熱い涙も、尙ほ心
 のうちを十分に彰し得ぬ。あゝこの苦しい心。心のまゝに涙が出たならば、私の頬が涙に
 彫られるのだとさへ思はれた。

『な……涙を』

と云つて私は妻の臉に唇をあてた。私は震える手で妻を抱きながら、流れ落ちる妻の
 涙を皆唇にうけた。強い夢魔に魅せられる様に無感覺になつた。——私の固い身體がい
 つしかに空氣の様に溶けて、私が今抱いて居る最愛の妻を包むと思はれた。

妻の涙が唇にたまつて、其の鹽い味が舌に徹つた時は、私は胸とお奥底迄及を貫かれる
 氣がした。(後になつて妻のこの堪えがたい泪の所以を知つて驚いたのであつた)

『ジウリアノ。今まで私がお前にこれ程に愛して居ると思つてくれたことはないかい。這
 麼祝福を夢みたことがあるかい。私……私がこう云つて居るのだ。あゝこの想……云ひつ

くせない。今までとても私はお前を解して居た。愛して居た。それを今はこうしてうも解
 けたのだ。お前が「いえ何も」と云つて呉れた刹那、かすかな呼吸の様な言葉であつたが、
 私はもう其れで新しい生命に這るのだ。ジウリアノ。いつまでも二人はこの幸福な生涯に
 這入らう……』

私は這麼な言葉をすべて、私の身體から出る聲ではなくて、遠い適かなとりとめもない
 裂けた様な音響が此の唇に乗つたのであつた。ただの咽喉から出る聲とは思はれず、心霊
 の鋭敏な作用が私の唇を掠めたのだと思はれぬ。

私が斯う云ふ迄は妻は黙つて涙を流して居たのであつたが、此の言葉を聞くと、激しい
 悲痛の聲を張りあげた。——その泣く聲……あゝそれは決して決して悦びが極まつて泣く
 のでなくて、眞に絶望悲嘆の叫びとしか思はれぬ聲であつた。その苦痛の烈しいのに時々
 昏迷に陥る程で、恐ろしい痙攣が全身にうねつた。私は急に妻から後いた、すると其の刹
 那に深い淵の間隔が出来たと感じた。只身體だけがはなれたのではない。合した心が無際
 限に切斷された。二人は明かに別々の離れたもの、二人の態度は既に永遠に裂けた。ジウ

リアノは身を跪めて顔をハンケチに埋め咽びつゝ居る。その歎息が柔かい妻の身體を破るばかりにはげしい。私はまだ跪いたまゝで居る。失神した様に然しハッキリと妻の顔を見て居る。それと同時に私の心のうちがどう變るかとそんな事まで判る。妻の泣聲の間、あいまいに燕の聲がきこれる。場所と場合との觀念が明瞭に浮んで居た。日光を浴びた花、その花の聲、静かな空氣などが明瞭に私の眼にうつる。その春の歡樂を飽くまでも恠まゝにした眺めが私を氣狂にさせる様だ。何んだか怖ろしい苦しいものが嵐の様に私を襲ふ。私は失神の裡に無暗に理智を求めた——突然黒雲の渦巻から凄い光が射す。暗澹とした恐怖の中に閃めいた……『妻は純潔でない』

何故その凄い光の閃きが私を倒して碎かなかつたか？何故私の身體は呼吸を失つてすぐ眼のあたりの妻の脚下に轉ばなかつたか？……不思議……あゝこの一瞬時、妻は私を幸福の絶頂から絶望の淵のどん底までつきととした……

私は無意識に妻の手首を掴んで、顔を匿して居る兩手をもぐやうに取り去り、無理に妻の顔を私の真正面に据えつけた。私の耳がガンガン鳴るので何を云つたか判らぬが、塞が

れた様な聲で『どうした。この涙の理由は』——私は詰問した。

妻は頭をあげ咽ぶのを堪えて私を視た。その眼は涙に充ちて擴つて、何となく今にも私が悲哀の爲め死にはすまいか。それを疑乎と待つて居る様な恐怖の様であつた。眞實の其の時の顔は、血の氣が全く褪せて居た。私は暗黒と恐怖の中に何思はず叫んだ。

『萬事休す。』

『いえ……いえ……ッリオ様。どうぞ。ッリオ様。妾弱くつて堪えられませぬで御座りました。つい泣きました。ゆるして……妾を解して下さつて……ッリオ様……どうぞ立つて頂戴な……妻と並んで腰かけて……』

ジウリアノの聲は泣き噎れた。時々苦しさに歎息をあげる。これ迄ジウリアノは私の苦しんで居るのを見ると、自分の身をいためる程苦むのであつたが、この時も殊に苦しい表情をして身を蕩擻く。ジウリアノの此同情は、實に優しいので、何物にもかへて私を慰める。私もそれをよく知つて居る。私の狡猾な心は今迄とても妻の此の優しい心根を呑み込んで居て故意と妻を戯つて、心に煩悶のありさうな風を見せて、その手で私を絆と抱か

せ其の優しい心につい小供になつて悦しがつたことも何遍か判らぬ。ジウリアノは此の時も矢張同じやさしい心で泣き苦しんで居る。

『どうぞ立つて頂戴な……妾と並んで……あのツリオ様、庭を歩いて見ませうか。まだ何も見ません。魚池に行きませうか。魚池に行つて顔を洗いたいわ。ね。何をそんなに考へていらつしやるの。どうぞ……もう幸福ぢやありませんの？ 妾は幸福ですわ。魚池に参りませうよ。池の水で此の泪にぬれた顔を洗ひませうよ。……何時？……もう十二時。フェデリコ様が歸るのは七時。まだ時間がありますわ……さ、行きませう。』

急いで亂れて痙攣のなかにジウリアノは語る。私の心の曇りを霧らさうと思つて、ひどく身の苦しみを抑へて居るのが見える。涙の宿つた其の眼元の赤いのに強いて笑を濺へて居るのがもう私の心を囚へてしまつた。眼元ばかりでなく聲にも様子にもその愛くるしさか溢れて、私は何となく恍惚とした。混亂した私の心に、ジウリアノの高潮した愛情が映つてくる。此痛切な千断れる様な心持は何と形容する言葉もない。その黙つて訴へる様な様子が、何となく「これより愛らしくはなれないの。どうぞ御心のまゝにして下さい。——

妾を抱いてよ……あまり酷くでなくやさしく抱いてよ。ひさしう抱いて下さらないのね。抱かれて死にたいわ。」と云ふ様に見える。ほゝえむ顔の愁に満ちて居るのが何となく私を平静にする。不圖ジウリアノは立つた。私も立つ、私の腕はいそがはしくジウリアノを巻いた。唇は唇に。

眞の戀人の接吻——二人は長い長い間唇を付けて、震へるのを合はせた。ジウリアノは疲れて、再び休息臺に仆れた。

『あゝツリオ様。疲れましたからしばらくゆるして。ゆるして。』

と云つて、私の方に手をのばして、私にも座れとねがふ。

『妾もう立つことが出来ない程に疲れましたわ。』

春の潮が満ちて濱を洗つて、總てのものを奪つて逃げる時、白い砂が綺麗に鮮にのこる。何物をも新たにする。再び燃えた情熱の掃除のうちに、私の心はすべての過ぎ去つたものを忘れた。残るは只茲に私の接吻の爲に仆れた女が只一人あるのみ——あゝ只私ばかりの接吻！その接吻に妻は仆れた。あたりは静かな花の咲いた庭。昔の楽しい記憶に満ちた秘

密の所。花の樹立に隣つて懐しい家が獨り面して居る。燕がそのほごりを翔つて居る。

『あゝまだお前を抱く力はあるよ』

と云つて私は妻の掌を擡げた。指と指とが相組んで居る。

『いつもお前の身體は軽いね。今日も軽くするんだね。さあ、さあ。』

ジウリアノの眼は一寸惑つた。が直様に急な決心でもする様に身體を動かして少しく後に凭りながら兩腕を伸ばし頭を傾けて、

『さあ起して頂戴な。』

と、ほえむだ。

直ぐ身を私の胸に仆す。此の時はジウリアノが接吻をした。長い間堪へた渴を一飲に醫するやうにその唇はあはたいしう私の唇に接した。ジウリアノが唇をはなすと、

『妾もう呼吸が消えそうよ』と云つた。爛れた様なその口、熱情で紅に燃えた唇、が眞青になつた顔に喰付いて居る様に見えて、死顔に唇だけが生きて居る様な不思議な印象が私を襲つた。

『貴君幸福ね！』と妻は顔をあげたまゝ、譚言の様に云ふ。睫毛の震へるのが何となく臉の下に苦しい漂ひがあるやうだ。

私は妻をいだいて胸にかたく絞めた。

『あの、歩いて見ませう。歩きたくはありませんの。ツリオ様。妾もう疲れて膝が動きませんから手を曳いて頂戴な。』

『では家に行こうかジウリアノ。』

『どこにでも』

私は片腕に力を置いて妻の身體を腕の下から固く抱いた。妻は睡遊者の様に歩む。只黙つて行く。おりおり眼を見かはすばかりであつた。何だか妻が新たな別なもの、様に思へる。些細な事が私の注意を全く奪つてしまふ。妻の頬の薄い黒痣、下唇のあたりの唇毛の曲り、顚顚の青い脈、臉のめぐりの影、美しい耳、殊に頸の上の美しき二つの黒子が、頸を纏つて居る。レースから見えかくれる。こんな些細なことが一々私の心を引き、何となく堪へ難くなる。妙に恍惚とした様だがそれでも感覺は明瞭に働いて居る。燕の

聲が聞える。近くの池に落ちる噴水の響が聞える。生命と時とが急がしげに過ぎ去つて行く様な氣持がする。三度私は春の歡樂の勝利を眼のあたり見せつけられた様な氣持、日の光も花も白さもみな堪え難い重みに思はれた。

『あれ私の柳を御覽くださいいな。』と二人が池の岸に着いた時、妻は大きな聲をした。私が歩くのに凭りかゝつて小刻に足を急がせながら

『まあ大きくなつたこと。記憶えていらつしやるの。植えた時はまだほんの小さなのでしたのね。』

と云つて暫く打たれたように沈黙であつたが、やがて變つた聲で

『あの時から始めて、御座いますね……』

妻は嘆息を忍び得かかつた。不圖こんなことを云つたのは却つて悪かつたと云ふ風情で急に立ち止まつて噴水の管の水を口に嘔むで、一寸顔を洗ひ、その顔をそつと私の方に向けた。接吻する爲であつた。洗つたばかりの顔も唇もまだ湿りを帯んで澤々して居る。接吻を終つてはなれた時、互の眸は同じ様な感の光をはなつた。その時のジウリアノの顔に

は、何とも名状することが出来ぬ表情があつた。後になつて判つた。——憐れな妻はこの刹那死と情熱との錯雜かつた間に強閃して恍惚の中にはや死を覺悟し觀念して居た。——今も思ひ浮べる、長い流れる様な柳の枝に影をうけてジウリアノが映つて居た。池の漣波に漾う春の光。反射しては柳の透き徹る緑を貫いて、震へながら妻の顔に當る。單調な噴水の響が懶いやうに迫つて来る。あたりのものが皆神經を攪亂させた。

兩方とも黙々と家の方に動いた。私の動悸は怕ろしい程激しくなつて感情の波は刻一刻と高まつて來て騒しい苦しい胸のうちにさまざまなことを卜答ひ返す。私は私自身が人事不省に陥つて居る様な氣がした。結婚式の折でも這麼にはなかつたかと迄思つた。ジウリアノの胸の騒ぎも堪へられなかつたに違ひないであらう。其時妻が立ちどまつて。

『あ……あの……あれ……こんなに』

と喘ぎながら殆んど呼吸がつまる様になつて私の手を把つた。胸にそれを押した。

心臓の裂けるばかりの鼓動が烈しく悸つのが着物を徹して判る。臉のあたりが涙で埋つて、呼吸が今にも絶えそう。私は兩腕で抱いて蹣跚と動いてやうやう檜の根方の處まで行

きついで二人一所に倒れた。

すぐ目の前には燕の群る昔懐かしい古い家が夢の樓閣の様に佇んで居る。妻は私の肩に頭を投げかけたまゝである。

『おゝ……ツリオ様……怕しい……死……』

ワツと泣いて心の奥底を刳る様な聲で

『……一所に死にます……』

此の最後の言葉を聞いて私は愕然と驚いた。その刹那思つた。先刻からのジウリアノの素振からしても、その心の底に痛切な迫つた怕ろしい深い煩悶があるに違いない。がどうしても判らぬ。たゞ二人とも人事不省になつて幻の中に悶搔くのだと感ずる丈であつた。夢の樓閣の様が家の目の前に浮いて居る。田舎的な素朴な玄關にも、軒蛇腹にも長押しも、雨樋にも窓の下にも、露臺にも燕が巢をかけて居る。新しいや古い土の巢が蜂の巢の様に重つて少しの隙も無い。戸締りして誰も棲んで居なくてもその家は常に楽しさうな柔しい生が溢れて居る。忠實な燕の群集にとり圍まれて、翼の速さ、歌の鋭さに……小鳥の

悦に活々として居た。亂れた矢が飛ぶ様に何も忘れて疲れることを知らぬ勇ましい翼で翔つて居る一群があれば、又親燕であらう巢の入口のところに羽ばたきして居るのもある。巢の穴々から二つに岐れた尾を顔はせながら現はして居るのもある。その尾が灰色な土の巢に映つて、目だつて黒く輝いて居る。光澤のある胸と鶯色な頸とだけ示して巢に休んで居るのもある。と思ふと今まで少しも姿をあらはさずに巢に匿れて居たのが、鋭ひ叫び聲して飛んで出る。此の閉された家の快活な楽しさうな状態が何となく神秘なものに見える。奇跡の様に微妙な感に打たれる。私等二人は暫く此様を見て黙つて居たが、やがて以前のことを忘れた様になつた。

魔術から通れた様に私が先づ口を開いた。

『鍵がある。行つて扉を開けやう。』

と云つて起きあがつた。

『あう一寸待つてツリオ様』

とジウリアノは怖じた様に云つた。

『ね行こう。開けやう』

と私は家の方に行つた。扉の所の三段の足場を聖壇の感で登つた。浄念の信者が聖骨塔をあける如くに私は扉に鍵を合はせて振らうとした。するとジュリアノの影が沿つてくるように音もなく私の後を偷んで来て居る。何思はず。

『お前？』

『私よ』と急に變つた聲で妻が答へる。其の呼吸が私の頬に觸れた。妻は私に身體を接して兩腕で私の首を巻き、その手首を丁度私の額の所で組んで居る。

此の偷むやうな戯れ、『私よ』と笑を含んだ聲、私をそつと抱いて驚かさうとする無邪氣ない小供の様な心。……可愛らしさの昔のジュリアノが直と胸に浮むだ。髪を長く垂れて快活に微笑むだ楽しい少女の姿……私は懐しい家の扉の前で、此の甘い幸福な思出に茫として終つた。拗ちかけた儘の鍵を見ながら

『開けやうか？』

『何卒』と未だ抱き緊めたまゝで答へた。其の唇が私の耳に當つて居た。

鍵の軋る音……扉は静に開き開くにつれて妻は次第にかたく私を抱き緊めた。燕は頭の上に輪をなして鳴いて居る。その鳴く聲を他所に唯鍵の軋る音ばかりが深奥な沈黙を破るやうに響いた。

『這入りませう。さあ、さあ。』とジュリアノ。

姿は見えなくつて、聲だけが耳の近くにある。人間のでは無い、神秘な聲のやうで私のハートの奥に透き徹る。未だ生れてから聞いたことのない女性の美しい響……その響であつた。

『さあ這入りませう。』

私は扉を廣く開けた。二人は一人の心地になつて鴨井を潜つた。

堂の中は鴨居の上から来る光線で明い。燕が一羽鋭い聲をたて、頭の上を翔けるので、見あげると圓天井の真中に巢を作つて居る。窓を見たら一枚硝子が壊れて居る。そこから燕は飛んで逃げた。

『妾は貴方に捧げた身ですわ。』

とジウリアノは叫びだ。尙ほ私に縋つて固く抱き緊めて居る。胸と胸ときつく相よせた。妻は顔をあげた。

長い長い接吻をした。

『ね、二階へ上らう。抱いて行かうか。』と云つた。私の感覚は既う亂れて、蹣跚になつて居たのだが、其れでも腕力があつて妻を抱へた儘二階へ飛び上る様な気がした。

『いえ。私ひとりで行きますわ。』

と云つてジウリアノは私を見たが、既う疲れて歩けさうにもなかつた。

庭を歩いた時の様に、私は妻の胸を腕に力を罩めて抱いて一足、一足と階段を運ばせた。森嚴な、沈黙な堂の中で、足の音が長く残つて響いた居る。外界と全く斷つて私は洞穴を廻る想があつた。

二階に登つた。が私は直に扉は開けずと、右に折れた暗い廊下を曲つた。一語も話さず唯ジウリアノの手を牽いて居る。妻の烈しい動悸が今にも破裂するばかり。それがありありと耳に來て堪えられぬ程であつた。

『何處に』とジウリアノが喘ぐやうに云ふと私は、

『あの部屋に』と答へた。

見分け難い程の暗であつたが、私の足は憶に導いた。扉のハンドルを探しあてた。扉が開いて二人は闇に吸ひ込まれてしまつた。

既う午後の二時。此の樂園に這入つてから三時間の餘を経た。私は暫時ジウリアノと離れてカリスト老爺を呼びに行つた。老爺は早午餐の用意を済ませて居る。今度も老爺に、「あつちへ行つて居れ」と云つた。老爺は別に不足げな顔もせず、眼の中に悦ぶ様な色を漂へて逃げて行つた。

産な戀人の様にジウリアノと私は卓に相對して座つた。二人の眸は互に悦びの輝きを交はして居る。卓の上には種々の涼しい御馳走——砂糖漬、ビスケット、橙、白葡萄酒の瓶がある。素朴な天井、淋しい壁繪、田舎の景色を描いた屏の繪、何となく總て舊式の趣があつて、前世紀に立ち返つた氣持がする。露臺の開いた屏から柔い光りが流れ込んで來る。空は眞綿の様な雲が漂つて居る。眼の前には尊げに茂つた檜が四角に刈られて嚴然として居る。梢には合唱する燕の群、根元には薔薇の花壇がある。遠くにはギラリラの光榮を讚美する様に、青々と森が連つて、美しい花に綴られて居る。色々の花の匂が蒸す様に

静かな春の風に連れて私等の方に吹いて來た。

『貴方未だ覺えていらつしやるの?』とジウリアノは二度も三度も云つた。此様な些細の事が皆昔の愛を思ひ出す媒介となつて、ジウリアノの言葉に登る。私等の樂園は、私等の愛の生ひ立ちの放郷で、懐しい物ばかりで満たされて居る。殊に此の様に味ふべき未來の新生命を渴望する心が、むらむらと起る。同時に近い過去の回想が意地悪く幽霊の様に現れて來るので、強ひても其を抑へつけ様と、未來の希望を種々に誇張して憧憬れた。

『明日も又此處に來やうか? 二三日の中には是非來やうね。然し不思議に此の庭は少しも變らない、何も昔の儘に残つて居る。……いつそ今夜は茲に宿つて行かうか? ね、ジウリアノ。左様しないかい?』

私は言葉と身振とで妻に同意させやうと頻りに求めた。卓の下では二人の足が相觸れて居る。妻は凝乎と私の顔を見いつて何も答へなかつた。

『ギラリラの初めの夜を思ひ出さないか——夕餉が済んで祈禱を終つて、戶外を散歩して居たら、窓に燈火が點いた。初めの夜の燈火は美しかつたね。あゝジウリアノ、彼の時か

ら今迄、御前は昔を忍ぶばかりだつたねえ。然し今日と云ふ今日から私は御前の爲めに盡す。どうか是から僕にある幸福を疑つて呉れるな。私は今御前を愛する程に強くは今迄愛さなかつた。が今は私は全く御前のものだ。今迄の事を皆懺悔する。何卒私の心を残りなく解して呉れ。既う私は小供の様な心になつて居る。只單純な心になつて、純無垢に御前の愛ばかりを思つて居る。過去の悪い事は全く忘れて居る。あゝ過去と云つても御前を忘れた事は一度もない。何んな罪を犯しても絶えず御前の事が心を隔れなかつた。其は一寸した花を見ても、木の葉を見ても懐かしい心が湧いて、眞實御前が戀しかつた。最早何もかくさぬ。いつかの晩に御前の寢室に山櫨子の花を持つて行つた時も、私の心は子供の様になつて、お前の愛を憧れた。私は何物をも捨て、お前を求めた。其心を察して呉れたのだらう、ジウリアノ。何事も笑つてお呉れ。私は動悸の高い胸を抑へながら、お前の寢臺の幕を上げて、そつと寢顔を覗いて、枕のかけに私の顔を打ち臥して、又呼吸を堪えてそつと室を出た時、最早夜は静に更けて、種々な深い考へに沈んだ事もあつたよ……』

『ツリオ様、ツリオ様……』

とジウリアノは私の言葉に堪えられぬ様に、笑顔を作つて。

『貴方はまあ何時も其様なこと被仰つて私を苦しめるのは最早許して下さいまし。女は弱い弱者ですわ、其様に仰しやられると私苦しくつて堪えられせんわ、私の顔は眞蒼になつて居るでせう』

ジウリアノは氣力がなささうに微笑む。臉は未赤味を帯んで重さうだが眸は愛情に燃える様な輝きを漾へ、柔い睫毛の影を透いて何か強い力を絶えず私の方へ向けて居た。何處と名づける事が出来ぬが、ジウリアノの身振には落ちつかぬ所がある。此様な場合には何時でも神秘に思はせる。表情が何んとなく謎の様になつて、複雑に朦朧になつて来る。「妻の心は渦巻で、自分も其中に渦巻かれながら仕うすることも出来ぬ。藻掻いて居る。急に改めることが出来ぬ」と云ふ様な神秘的な感じが段々と重つて来て、私の感情が不安になる。さうなればジウリアノは眸が、愈々輝くやうに見えて、私の骨の髄迄通る様な氣持がする。

『御前は何も食へないのねえ』

私は此の神秘な不安な霧を拂ふと思つて、故意と斯う問ふた。

『貴方も何もあがりませんのねえ』

『私は最早大分飲んだ。此酒をお前は覺えて居るかね？』

『覺えて居ますとも』

『記念だねえ。』

妻が特に嗜好の白葡萄酒の薄黄色な液が洋杯に満ちて居る。二人の眸は光を交はした儘動かずに居る。此の懐しい酒の思ひ出と馨とに急に氣が茫とする様である。

『さあ一所に飲まう——私等の幸福の爲めに。』

二つの洋杯をカチリとさせて、私は一思に飲み干して終つた。ジウリアノは洋杯の縁を唇にあて、少しづつ飲んで居たが、急に思ひ出した様に唇を離す。

『一呼吸に』

『ツリオ様、飲めないわ』

『何故？』

『でも飲めないんですもの、既う一滴でも飲むと眼が眩みさうですわ』

急にジウリアノの顔が蒼ざめて来た。

『どこか悪いんじやあないかい？』

『あの一寸何處か歩いて……露臺にでも行けば治りますわ』

私は妻を抱いて、

『此處にお休み、さあ茲に私が斯うして看護をするよ』

『否、其には及びませんわ、最早よくなりましたから』

二人は檜の老樹の向ひ側になつて居る露臺の端まで一所に歩いて行つた。ジウリアノは鐵の欄干に凭りかゝつて片腕を私の肩にかけて居る。屋根から突き出た材木の端に燕が一つばい巢をかけて其まはりに喧しう鳴いて居る、が庭の深い静さは、四邊を領してしまつて、森然とした檜が私の目に厳しう映ずる。燕の翼の磨れる音も、鳴く聲も此の茂みに吸ひ込まれると思はれた。段々薄れ行く夕日に目路遙に朦朧として来て、静寂の心が愈々起つて来る。私は何となく此の沈思の夕暮の空氣を心限り呼吸して見たく、長い長い間此處

休んで、有りたけの黄昏の甘さに酔ひたかつた、

『此の邊には澤山夜鶯が居る筈だね』

と私は夜鶯が夕闇に鳴く酔はせる様な甘い歌を思ひ出して云つた。

『左様ですよ。確に居ますわ』

『夕暮れになると屹度鳴くねー、聽いて行かうねー』

『でもフェデリコさんが歸つていらつしやりはしないでせうか』

『何時に歸る筈だつたかね』

『晚い方が宜うございますのねー』

と何か眞底から喜びに満ちた様な聲を立て、ジウリアノは云つた。

『楽しいの？』

と私はジウリアノの眼を覗き込むやうにいつて問ふのであつた。

『楽しい御座いますわ。』と睫毛を垂れて、

『既う御前は信じて呉れるだらうね？ 私は只一人御前を愛し、此身を永遠にお前の爲めに』

捧げて居ると云ふことを。

『既う信じて居ますわ。』

『而して私を何れ程に愛して呉れるね？』

『其は貴方がお察し出来ぬ程に深く思つて居ますわ』

妻は斯う云つて、今迄靠れて居た鐵の欄干から離れ、私の胸に捨てる様に身を投げかけた。女が此の様な刹那にする、身も心も打ち捨て、一瞬に良人の胸にすがる優しい情が此時限りなくジウリアノに現れた。其折の美しくさ。崩れる様に、溶ける様に、柔しくなつて、蒼い顔が髪ほつれの間に浮んで見える。頬に落ちて居る眸の影は、目をむけられるよりも猶私の心を曳く力があつた。

『私の方も御前の察せられぬ程だよ。私の胸に湧いて湧いて止まぬ思は、語り盡せぬ。自分で自分の幸福が驚かれる。既う死んでも宜い位だね』

『死んでも……』

とジウリアノは絶えいるやうに微に笑つて、

『ツリオ様。あの……私も死んでも構ひませんわ。直に死ぬかも知れませんもの。』
『ジウリアノ……』

妻は體を伸ばして顔を正面に私を見た。猶言葉をつゞけて

『あの、ツリオ様。今私が此處で急に死ぬるとすれば仕うなさいますの？』

『馬鹿なことを』

『假に明日にでも死んだら』

『其様な事を云つて仕うするんだね？』

私は兩手で妻の顔を抱き、頬に、頬に、額に、髪が軽い速い接吻を溶びせた。妻は其の儘にさせるのみか一寸私が唇を離すと、

『まだ』と、

『明日、明日又此處に來やう。今日よりも早くね。』

私に何で此様に刺撃されたか自分では判らぬが燃える程な情の輝きに斯う云つた。

『明日此處に宿らうね。左様しやう。』

『明日？』

『さう。而して私等の生涯を新にする。——此の家で、此の庭園で、此の春の光を浴びて而して二人の愛を甦す。ね昔の様に一つひとつ抱擁を新にしてね。』

『あの……ツリオ様……未來を話して下さいますなあの未來は怖しう御座いますわ。』

今日、今日の事はかうと話して下さいます。最早先の事はおつしやらずに……
と亂れて私に抱きついて、氣狂ひと思はれる程私の唇に接吻を重ねた。

『馬車の音が聞えますわ。フェデリコ様がお歸りじやあないの？』
とジウリアノが椅子から立つた。

兩人は耳を傾けたが、鈴の音は聞えなかつた。

『既にお歸りなさる頃ですわね。』とジウリアノ。

『さう。既う七時になるね』と私。

『仕方なすつたのでせうね。』

兩人は尙ほ暫く耳を傾けたが、馬車の來さうな響は一向に聞えない。

『ッリオ様、外迄出て見ていらつしては？』

で私は室を出て、階段を降りた。歩行が危い程霧が深く置ひで、何だか私の腦が慣として煙にでもなりさうな氣がした、庭園垣の側門を開けてつい其處に棲ひて居るカリスト老翁を呼んで、馬車は來なかつたかと問ふて見たが、未だ見えませぬとの返辭。

老翁は頻と私と話したがつて、引き留め様として居る。

『老翁。又明日來る。明日來たら屹度泊つて行く……』

すると老翁は嬉しさうに兩腕を擡げて、

『眞實で御座いますか？』

『眞實とも、明日は必ず來る。老翁とも澤山話が出来よ。馬車が來たら直に左様知らせてお呉れ。』

と云ひ捨て、置いて、私は再び家に歸つた。夕暮は愈々迫つて來て、燕の喧噪も激しくなつて來た。沈まうとする夕日の光りは、數百の小鳥の紫めいた翼にギラギラと照り榮えて居た。

ジウリアノは、歸り仕度に今帽子をかぶつたばかり、姿見臺から離れて私の方に向いて、

『おや左様。』

『馬車の影も見えない。』

『私の顔を御覧なさいな。……真青でせう。』

『いや』

『でも此の眞青な……』

實際其時の妻の顔は、今棺から出たと云ふ青さ。臉のあたりが紫色になつて居たが、それでも『私生きて居ますわ』と強いて笑ひを浮べやうとした。

『大變苦しいの？』

『いえ。ツリオ様。何ですか知りませんが、私は身體が空な様な氣がしてなりません。頭も胸も空で、血も通つて居ない様なの。私の體は貴方のものですが……私何だか此の身體が生命の影ばかりと思へまして……』

這ふ云つて妻は何とも云へぬ不思議な笑ひをした。其が影のやうな巫女の笑顔の様に思へて、無限な不安が私の心の中に起つた。同時に私の心はとり紛れて終つた。思ふ事が順序がなくなり、思考の力が消えて終つた。別に凶事の様に思はれたのではないが、私は全く力の缺けた心で疑乎シウリアノの顔を見いつた。

シウリアノは再び姿見臺の方に向いて、帽子を冠り直して、それから卓に行つて腕飾と手袋とを着けた。

『私用意しましたわ。』

と云つて、何か忘れ物でもした様に身のまわりを見まはして、

『あれ彼の蝙蝠傘を……』

『うゝ、私も左様思つた。』

『おゝ、左様、彼の庭園の休息臺に忘れたんですわ。』

『一所にとりに行かうか？』

『ですけれど私既う疲れてしまひましたわ。』

『では私が行つて取つて來やう。』

『否、否、ツリオ様。老翁を遣つて下さいまし。』

『私が行かう。而して紫丁香花の枝と、麝香薔薇とを折つて來て上げやう。』

『否、ツリオ様。花はいりません。』

『まあ此處にお座り、どうせフェデリコが歸るのはもつと晩いだらうよ』

と云つて、私は安樂椅子を露臺に出してジウリアノに腰かけさせた。而して私が出かけやうとすると、ジウリアノは、

『あの御出かけならカリスト老翁に左様おつしやつて下さいな。私の外套を多分老翁が持つて居るのでせうから其を遣すやうに……私寒いから。』

と云つて聲を震はせた。

『寒い？露臺の扉を締めやうか？』

『いえ。扉をしめずと、外の景色を見せて下さいました。此の頃が一番美しい御座いますのね。何だか詩の様ですわ。』

金色の夕日が此處彼處に朦朧と輝いて、紫丁香花の葩の端々が濃い紫に照り、下の方の枝々は稍灰色が、つた色に憎されて居る。其が總て微風にそよいで居て、絹の綾目が光る様に葉裏をかへす時がある。柳の樹は悲しげな髪を池の水に垂れ、池の水は底にある眞珠殻で輝いて居る。動かない光線と、徐々動く緑と、死に行く夕陽に照らされた燃えるやう

な花。其の花が鏤めた様について居る森の茂み、瞳にうつる景色の態々が、最後の輝きに一つ垣塙に焼かれるやうに爛々と燃えて何となく此のあたりに魔の誘惑の濛々幻影が渦を巻くかとも思ひなされる。

兩人とも此の景色に魅せられて、黙つて暫の間立つて居た。理由のない懨懨が私の心を領してしまつた。夫れは人間の情熱の裡に必ず潜むで居る。漠然とした不安の想ひであつたかも知れぬ。此の時私の身のうちにそつと起つて來た此の美しい景色を眺めて居る私の上に身體の疲勞、心の失ひが重く重く壓して來た。不快の情に満ちた、頼る所のない状態が襲つて來た。夫は極度の悦びに續いて急に起つて來る把み處のない後悔の苦痛……私は酷くなやんだ。

『私茲に眼をつむつて何時迄も此儘にして居たう御座いますわ。』

と夢言でも云ふやうに云つて、ジウリアノは又ぶるぶると震えたが、

『あゝ寒い。ツリオ様、歩きませうか？』

椅子の凭掛に凭れて、ジウリアノは、痙攣でも堪えるやうに縮み込むだ。

其顔、殊に鼻のあたりが何處かで見た石膏像の様に透き徹つて居て深い苦悶が現れて居る。

私は驚いて、

「何處か痛むの？」

「寒い……ツリオ様……外套を取つて来て下さいまし。」

私は直様、カリスト老翁の所へ行つて、外套を取つて来て、妻に着せると妻は急いで其を着て、再び椅子に仆れて、両手を深く外套の袖の中に入れて、

「あ、是で……」と云つた。

「蝙蝠傘を取つて来て上げやう。何處においたかね。」

「いえ、いえ、蝙蝠傘はいつでも……」

が私の心は何となく彼の樂しかつた休息臺の所へ行つて見たかつた。彼の休息臺で妻は激しく泣いた。私の事は何も苦に思はぬと云つた。彼の休息臺に行き度い願は、一刹那の感情であつたのか、好奇心であつたのか、或は此の美しい景色に作用された一發作に過ぎ

なかつたか、仕うしても行き度い心が停められぬので、

「直に歸つて来るから」

と云つて降りて露臺の下に行つた時、見上げて『ジウリアノ』と呼んだ。妻は上から見下した。其以來私の心の眼に、屢々影れて映るのであるが、夕暮の薄暗い中に幽霊の様に脊の高いジウリアノが、長い紫の外套に包まれて、死人の様な蒼い蒼い顔を私の方に向け姿……。聽て妻は一足後に退いた。退いたと云ふよりも、其折の私の感じでは消えた様であつた。私は急いで、何を考へるともなく小徑を下つた。足の運びが一々私の脳に響いて来る。私は二三歩行つて立ち止つて、頭の亂れを鎮めたのであつた。何故此の様に錯亂したか？無論私は其折神經が非常に過敏になつて居た。只其だけだと思つて居たが、其でも仕うする事も出来ぬ。只精神の過敏のまゝに何事もまかせて終つた。見れば見る物が實際よりも變つて居る。誇張されて居る。ハルシネーションの様に思はれた。折々輝いた物がカッと頭の中に閃いて来るかと思ふと其が又一層頭を錯雑にする、ジウリアノが仕うしても昔のジウリアノとは思はれず、何んだか今迄とは全く別な境遇に生れた女だと思はれ

てならなかつた。何んだか異分子が這入つて来て、ジウリアノの體を全く他の者と替へて終つた様だ。あゝ此の變りやう……健康を破壊すると此の様になるのか知らん。私は苦しいわ。」と妻は屢々云つた。が苦しい……病氣の苦しいだけで是れ程に人間が替るものだらうか？あのいつかの手術が未十分でなくつて、病根が残つて悪業をして、あの様にジウリアノを亂してしまつたのではあるまいか？「私直に死ぬかも知れませんが」などと殊更に云ふのは死ぬるのを豫め知つて居るのではあるまいか？仕うして滅びねばならぬかと云ふ運命を明瞭と見て居はすまいか？妻は死の事を話したのは二度や三度ではない。妻の心は死ばかりを考へて居るのだらう。私もジウリアノを抱く時、何となく死ぬると云ふ感じが胸を突いて来る。太く輝いて急に照る幸福の光はジウリアノにとつては寧ろ追つて来る幽霊の影の凄さを一層鮮かに見せたものではあるまいか。「して見ればジウリアノは死ぬかも知れぬ、私の熱い抱擁のなかに幸福の愛の絶頂に呼吸をひきとつてしまふのではあるまいか？」私は考へた。その上斯うしてとゞまつて居る私の身に、氷の様な冷たい震が襲つて来る。又襲つて来る直ぐ近くに危険が迫つて居る様に思はれる。「明日私が死んだら」と云ふジウ

リアノの言葉が仕うしても不吉な夢現を露呈して居る様だ。夜露が早やシツトリとかつた。何か猛獸がそつと足の音を偷んで歩いて行く様で。森の葉がザワザワ揺れる。微風だ。後れた燕が石を抛げたやうに翔つた。西の方の地平線の上には、未だ微かな薄光が漂ようとして居て、凶變の火事場跡の様な感じを與へた。

休息臺に行つた。蝙蝠傘はあつた。此處にジウリアノが腰を掛けたはつい先程だ、此處で涙を落した。茲で私は種々私の心の中を打ち明けた。「私が遠い他に歡樂に走つたのはお前を得たい爲めで、其のお前は實に私の家の中に居たのだ。」と云つた。妻の唇が微に揺れて、漏れる言葉を聞いて、私は幸福の頂點に達した想がした。茲でジウリアノの涙を唇にうけた。獻敬るを見た。「萬事過ぎ去つた」と云つたも茲だ。

未だ數時間もたぬのに、既う昔の様な氣がする。私の幸福の夢が總て消滅しさつた様だ。而して一層違つた怖ろしい意味で「萬事過ぎ去つた」と云ふ感が聳と迫る。不安な心の騒ぎが蠕つて来る。怖しい物を包んで居る様な暗黒が四邊に迫つて来て、麗しかつた紫沈丁香の茂みには葉摺の音が疑の響をさやさと渡らせる。段々暗黒になる。禍の姿が

私の心に満ちた。

吓——萬事は最早過ぎ去つたのではあるまいか？ シウリアノは、自分で自分を宣告して居るのではあるまいか？ 私は全く最早望みを失つてしまつて、生きやうと云ふ考へもなくさらばと云つて刃を以つて自殺する事も出来ず、故意と病の根を残して其に仆れやうとするのではあるまいか？ あはれ一歩一歩終焉に近づかうとして居る。……眼のあたりははや毒々しい運命の神に睨みつけられてせめて私のキッス……其情熱のありたけを置めた燃えるやうな接吻、熱い熱い只一つに死なうとして居るのではあるまいか？ あ、私は善に歸らうとした其時無限の喜悦が妻の眼のあたりにひらけるのだらうと思つた。此の夢想が一日の中に現實となつた。が此の美しい現實にもシウリアノの唇には屢々死と云ふ言葉が上る。死！と思ふ刹那、シウリアノが危険な手術にかゝつた時の事を思ひ出した。惨じい光景……醫師の刃で切開されるシウリアノの體が解剖圖の様に私の幻影を掠めた。すると又次の刹那には薄暗い、氣味悪い夜の室に蠟燭の火炎がトポトポと揺いで、其が姿見臺にうつる。窓掛が遙々と動いて、寢臺の上にシウリアノの死苦にうめく幻影が浮んで来る。

何だか隅の方で、「シウリアノを這度にしたのはツリオであるぞ」と云ふ聲が反響する。急な嵐の様に襲つて來た此の恐怖に攪まれて、私は此の幻影を實際だと思つて、家の方

に走つた。

家は墓石の様にイずんで居る。露臺も窓も暗い陰を宿して居る。

「シウリアノ」と叫んで急いで階段をのぼつた時は、既う死に目に會ふには遅いと云ふ感じ迄した。

何と云ふ心の狂亂であつたか。

喘ぎ喘いで苦しい呼吸をして、二階にあがつた時シウリアノは、

「あ……どうなすつて？」

と椅子から立ち上つて驚いて問ふた。

「いや何も。御前私を呼びはしなかつたの、只驅つて來たからこんなに呼吸がはづむで……」

と私は云つた。すると妻は、

「ツリオ様。私寒くつて……そろ此様に」

と手を伸ばした。其の手は氷の様であつた。

「私何時も這麼に冷いのですよ。」

「仕うして這麼に冷えるのだらうね。どうかして暖めて上げやうか。」

「いえツリオ様。騒ぐには及びませんわ、這麼に冷えるのも始めてはありませぬわ、何時も二三時間、此の様に冷くなつて居ますが直き治りますの。待つてさへ居れば……何故にフェデリコ様はお歸りにならないのでせう、既う夜になりましたのに。」

と、此の數語に總て力を奮はれた様に、ジウリアノは弱々しく、又椅子に仆れた。

「扉をたてやうか。」と云つて、私は露臺を横ぎりかけると、

「いえ、いえ、開けておいて下さいまし、私の冷えるのは寒さじやありませんの、却つて扉を開けて置いて冷える方が宜しいの、其れよりか私の傍へ座つて下さいな。あのあそこに猶一つ椅子がありますわ。」

私はジウリアノの側に蹲むで座つた。妻は凍えきつた手を伸ばして私の髪を撫で、居た

が、吐息交りに微に、

「……ツリオ様……」

「私は既う堪えきれないので、」

「ジウリアノ。最愛のジウリアノ。お前は私の生命だ。何も秘さず、眞實の事を打ち明けて呉れ。お前何か私に秘密がある。慥かに御前は何か私に云はない煩悶をして居る。茲に來てから、ギラリラに來てから、二人が幸福になつたと思つた其の時から、お前の心には、何か苦しい物はないか。私を何時迄も暗い所に置かずと、何卒打ち明けてお呉れ。或はお前は病氣かも知れないが……病氣より他に、私には判らぬが、お前は苦しい想ひをして居るじやあないの？私は何うなつても構はぬ。いつぞ聽かしてお呉れ。今朝お前が泣いた時。「萬事後れた」と私が云つたら、お前は「いえ、いえ」と答へて呉れたではないか。ねえ。私は御前を信する。ね。ジウリアノ。何も打ち明けて悪い事はないだらう？どうも御前の幸福を妨げるものがありさうだ。御前の其の煩悶を、さあ話してお呉れ。」

私は妻の眸を見入つた。妻は唯黙つて居る。其の二つの臉が大きく開かれて、動かす暗

うなつて居るばかり、其のぞつとする感じを防がうと強いて眼を閉して終つた。互に深い沈黙に落ちた。其の怖ろしい沈黙が一時間であつたか、はた一秒時であつたか今でも分らぬ。

「唯。病氣ですわ……」と妻の唇が震えた。

『どんな病氣?』と疑惑と不安と而して怖ろしい物を強いて自白する様な決心で私は云つた。自分で自分の言葉に氣の觸れたのではないかとさへ思つた。

「どんなに苦しいね? 死なねばならぬ程?」

どんな風に、どんな聲で私は此の最後の間を口にしたであらう。私は此の間が自分の唇から漏れて出たのか。又此の間がジウリアノの耳に達したか否かが更に判らぬ程餘裕がなかつた。

「否。ツリオ様、左様じやありません。斯うなつたのも何も煩悶からじやありません。何卒ツリオ様。お察し下さいまし。今少し経てば分りますから、只信じて下さいまし。ねえ。私何も貴方におかくし申す様な秘密はありませんもの。私の病氣はもう直ぐ治ります

から待つていらつして下さいましな。ねえツリオ様、お、貴方の御顔こそ眞蒼。貴方こそ疑つて煩悶していらつしやるんですわ。仕うして……さあもつと此方へ……接吻を續けて……暖めて下さいまし……フエデリコさんがお歸りではありませんの?」

ジウリアノの聲は少し嘎枯れて亂れて居た。其の震ひつく様な表情は先刻休息臺の所で私を慰め様、鎮めやうとした時よりも猶は強く引きつけた。私は接吻した。椅子の腰掛が廣くて、身體が小さいので妻は身を片よせたので私は座つた。而して二人は相抱いた。胸と胸とが全く合して呼吸が錯る。「私の息の温味がジウリアノに染み込む様に」と心の中に思つて疑乎と手に力を置めて握り緊めた。

「今夜は夜徹し御前を抱き緊めて温めてやる。最早震へてはいけないよ。」

「ハイ。」

「今夜はお前の顔を見守つて居る。ねえ。ジウリアノ、御前は夢の中に私の名を呼んで……」

「……」

「ハイ。」

「あのいつかお前は夢の中に私の名を呼んで呉れた。嬉しかったよ。御前は聴かなくて、私が聴いたあの時の聲は嬉しかったよ。其を今夜も……ねえジウリアノ。而してツ……私の名がお前の唇を洩れた時。私は接吻を待ち受けた。私もお前の夢に言葉を入れ様とそつと耳元で囁いた。あの時程楽しかった事はなかつた。私は毎朝御前の顔を視つめて、未だ彼の夢が残つて揺いで居るのではなからうかと思つたよ。ジウリアノ、是からは彼の時よりも猶ほ楽しい時が来るねえ。お前の病氣は治つて幸福になつて優しい愛に歸るんだねえ。ジウリアノ。」

「ねー」「ネー」と妻は幾度も繰り返して聴いた。其の度に自分の言葉に酔ふ様になる。私の胸は躍る。夢の戀歌に誘はれて甘い眼りに落ちる様であつた。

「あら。一寸。」と云つてジウリアノは耳を傾けた。

「フェデリコ？」

「いゝえ、お聴きなさいな。」

二人は庭園の方に向いて耳を澄ました。

庭園は一面に紫紺に溶けて了つて、只池の面が鈍く光つて居るばかり。地平線には未だ一抹の絲の様な光が残つて居て虹の様に見えるが瞬時に血の様に赤らみ、其れからオレバヂになり、終には枯葉の色に褪せた。此の夜の静寂を破つて笛の高調のやうな清い啼聲が響いた。

夜鶯である。

「柳の枝で鳴いて居ますのねえ。」とジウリアノが私の耳元で囁いた。

二人は耳を傾けた。顔は暗夜に奪はれて行く西のあかみの方に向けた儘で。力の強い愛が滴つて来る様な其の鳥の聲に、私の心も身體も全たく奪はれて終つたる妻——私の側に耳を傾むけて居るジウリアノがどの様な深い思ひで此の小鳥の歌を聴いたであらうか？

……。

夜鶯は歌ひはじめた。始めは眞珠の雨が空気に摺れて落ちる響の様に、楽しいメロヂーに響いた、暫く休んだ急に噪しい長い聲の力を試みて居る様な歌が、譬へば現れない敵に誇傲を挑むで居る如くについで起つた。ついで又今度は微な嘆きの吐息に合はす悲歌の

調の様に、低調の歌が静かに響いて、淋しい戀人の悲しさや、希望の遠ざかる愁の胸やにおとづれて、聴て張りきつた一聲にとまつた。稍長い間、嚴かに止まつたのである。三度哀悼の歌の様な、同じ小鳥の咽から出るとは思はれない變つた聲で鳴いた。巢にうごめく燕の子の様に低い謙遜つた欣び求める様な聲がだんだん細つて行つたと思つたら急に驚く様に調が高まつて来て、輝く様な歌となつた。尙ほ高まつて行く。四邊に清く澄みきつて響き渡る。安全な港に船いりする様な調が強くなつた。急にとまつて急に最高調に響いた。小鳥は自分の歌に酔はされて居る。最高調の響きが未だ終らぬ先に蜜の様な甘い甘いメロデーにかへつた。情熱のゆらぎの様に高く低く、軋るやうに崇嚴に華かに、或時は憧憬の喘ぎの様に搖ぎ、沈み行く我が胸に抒情詩の様に信樂の様に響く。……庭園が總て呼吸を殺して聽いて居る様であつた。大空が柳の樹に懸つて、枝の間に口のない詩人がハートの儘の調を宿して居る。花のある森が肅然としてゐんで居る。西の地平線の低い所には有るか無いかの明みが仄に残つて、明星が光る露の玉の様に煌とした。

「明日は……」と私は何思はず云つた。此の明日が數へきれない程に美しい希望を持つて

居るので遂に溢れたのであつた。

兩人が夜鷺を聴く間は私は椅子から隔れた儘であつた。此の間は數分間もあつたであらう。不圖妻の頭が私の肩に重く凭れかゝつた。

「ジュリアノ！」と呼んだ。「ジュリアノ」と續けた。此の聲と共に妻の頭は後の方にそつた。

「ジュリアノ！」

答が無い、露臺の方から来る微な光に、妻の死人の様な蒼い顔が見えた。急に恐怖に襲はれて、妻と一所に椅子に仆れたまゝ、黙つて妻の胸のあたりの鈕を逸して、掌を當て、心臓の鼓動を見た。

「鴛鴦のやうな弟や妹は何處？」と兄の快活の聲が私を呼んだ。

ジウリアノは間もなく我に歸つたが、足の力は衰へて歩む事は出来なかつた。其れでも早く馬車に乗つて歸らうと頻に云ひつゝけた。

私の着物や、兄のまでも脱いで妻に着せ、靜に馬車の隅に横にならせた。而して兄と交るがはる看護する。清らかな天のもとに平和な四月の夜が去つて、御者使の鞭の音と共に花の籠に沿つて馬車は速く走つて行く。

何遍もなく兄はジウリアノの心持を問ふ。

「有難う。少しは良くなりました。」

「寒くはありませんか？」

「え……少し……」

妻の答は苦しうで、却つて私等が問ふのが苦しうに見える、フエデリコが種々に話を持ち出して見た時も「フエデリコさん許して。私お話するのが苦しいから……」と云た

位であつた。

馬車の車蓋が深くかけてある。暗い闇の中にジウリアノは包まれて居る。色々の着物に纏はれて居るまゝで少しも動かぬ。私は折々靠れる様に身體を曲げて、ジウリアノは熟睡して居るのでは無からうか、此儘で絶え入つて終ふのではあるまいかと其の顔を覗きこんで居た。其の度にジウリアノの二つの眼が大きく廣がつて只凝と闇の中を見入つて居るのに驚いたのであつた。

フエデリコも私も口を利かず、長い間沈黙であつた。馬の驅るのが遅いやうに思はれてならぬ。御者が全速力にして呉れるといふがと私は心の中に願つた。

「急いで、ジオバンニ。」

ラバデオラに着いたは既う十時近くで、實母は私等の遅いのに神経を痛めて待つて居た位。ジウリアノの状態を見ると、

「お前には遠すぎる旅行だと先からも心配して居たのだが……」

と叫び出す。するとジウリアノが實母を慥める様に、